

# 田宮平遺跡

都市計画道路田宮・中柏田線整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第410集

た くう だいり  
田 宮 平 遺 跡

都市計画道路田宮・中柏田線整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 28 年 3 月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて、埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県竜ヶ崎工事事務所による都市計画道路田宮・中柏田線整備事業に伴って実施した田宮平遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、旧石器時代から室町時代まで断続的に続く人々の生活の様子についての一部が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者である茨城県竜ヶ崎工事事務所に厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、牛久市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一

## 例 言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成 26 年度に発掘調査を実施した、茨城県牛久市田宮町字平 1030 番地ほかに所在する田宮平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成 26 年 10 月 1 日～ 11 月 30 日  
整理 平成 27 年 6 月 1 日～ 8 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 寺内 久永  
首席調査員 兼子 博史  
調査員 田村 雅樹
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、首席調査員兼子博史が担当した。

## 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = - 1,680 m, Y = + 26,920 mの交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C..., 西から東へ 1, 2, 3... とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c..., 西から東へ 1, 2, 3, ... 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ビット SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑  
SS - 石器集中地点 TP - 陥し穴




遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石核・剥片 TP - 拓本記録土器  
土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・施釉		火床面
	粘土範囲		柱痕跡・柱あたり
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属製品
----	硬化面		

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)。

- 7 今回の報告分で、整理作業の段階で遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは、以下のとおりである。

変更 SK24 → SB 3 P10, SK27・34 → SB 4 P11

SK 39 → TP 1, SK42 → TP 2, SK63 → TP 3, SK40 → TP 4

SB 3 P10 → SK67

欠番 SF 4, SK43・51

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
田宮平遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 旧石器時代の遺構と遺物	13
石器集中地点	14
2 縄文時代の遺構と遺物	18
(1) 陥し穴	18
(2) 土坑	21
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	23
(1) 竪穴建物跡	23
(2) 掘立柱建物跡	39
(3) 土坑	41
4 室町時代の遺構と遺物	42
(1) 掘立柱建物跡	42
(2) 土坑	44
5 その他の遺構と遺物	45
(1) 掘立柱建物跡	45
(2) 溝跡	48
(3) 道路跡	48
(4) 土坑	50
(5) 遺構外出土遺物	53
第4節 まとめ	56
写真図版	PL 1 - PL10
抄 録	

## た くう たいら 田宮平遺跡の概要

### 遺跡の位置と調査の目的

田宮平遺跡は、牛久市の西部に位置し、<sup>いなりがわ</sup>稲荷川左岸の標高23～24mの台地縁辺部に位置しています。今回の調査は、都市計画道路田宮・中柏田線整備事業に伴って失われる遺跡の内容を、図や写真に記録して保存するため、平成26年10・11月の2か月間、茨城県教育財団が実施しました。



### 調査の内容

調査では、<sup>たてあなたてものあと</sup>竪穴建物跡4棟（奈良・平安時代）、<sup>ほったてはらたてものあと</sup>掘立柱建物跡4棟（平安時代1、室町時代1、時期不明2）、溝跡2条（時期不明）、道路跡3条（時期不明）、<sup>おとあな</sup>陥し穴4基（縄文時代）、土坑58基（縄文時代2、奈良・平安時代2、室町時代1、時期不明53）、石器集中地点1か所（旧石器時代）などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（甕・甌）、須恵器（<sup>つぎ</sup>坏・<sup>こうだい</sup>高台付<sup>ふた</sup>付<sup>ばん</sup>蓋<sup>ばん</sup>盤<sup>ばん</sup>高盤<sup>せんとう</sup>甕<sup>き</sup>甌<sup>な</sup>甌）、土師質土器（<sup>ない</sup>内耳<sup>なべ</sup>鍋）、<sup>かいゆう</sup>灰釉陶器（<sup>ちうけい</sup>長頸<sup>へい</sup>瓶）、<sup>しきく</sup>土製品（<sup>しきく</sup>支脚）、<sup>せんとう</sup>石器（<sup>せんとう</sup>尖頭器<sup>そうき</sup>・<sup>さつき</sup>搔器<sup>ぞく</sup>・<sup>といし</sup>削器<sup>せつかく</sup>・<sup>はくへん</sup>鎌<sup>はくへん</sup>・<sup>といし</sup>砥石）、<sup>とうす</sup>石核、<sup>わんがたさい</sup>剥片、<sup>わんがたさい</sup>金属製品（<sup>とうす</sup>刀子<sup>わんがたさい</sup>・<sup>わんがたさい</sup>釘）、<sup>わんがたさい</sup>碗形滓などです。



田宮平遺跡全景（上空から）



出土した石器類



縄文時代の陥し穴



第4号竪穴建物跡調査風景



竪穴建物跡から出土した遺物

## 調査の成果

今回の調査で、当遺跡は旧石器時代から室町時代まで、断続的に人々の生活が続いていることが分かりました。旧石器時代の石器集中地点は、石を加工するときに出る剥片が多いことから、石器を製作する場所であったと考えられます。石材は栃木県高<sup>たかはらやま</sup>原山産の黒曜石<sup>こくようせき</sup>が多く、当時の人々の交流を考える上で、大変重要な資料となります。また、縄文時代の陥し穴4基を確認しており、当遺跡の周辺は、狩猟場であったことが分かりました。

その後、奈良・平安時代になると集落が形成され始めます。第3号竪穴建物跡は建物を拡張した様子を、第4号竪穴建物跡は竈を北から東へ作り変えた様子を確認しました。また、第2号竪穴建物跡からは椀形滓<sup>わんがた</sup>が出土し、第1・3号竪穴建物跡からは鉄滓<sup>てつさい</sup>がそれぞれ出土していることから、周辺に鍛冶工房があった可能性があります。今回の調査区は、集落の南端であり北側に集落が広がっていると考えられます。



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県竜ヶ崎工事事務所は、牛久市において交通の円滑化を図るために都市計画道路田宮・中柏田線整備事業を進めている。

平成21年5月26日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、都市計画道路田宮・中柏田線整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成21年9月10日に現地踏査を、平成25年6月6日、平成26年2月28日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。茨城県教育委員会教育長は、平成25年6月12日、平成26年3月5日に、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内に田宮平遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成26年2月6日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成26年2月21日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成26年3月5日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、都市計画道路田宮・中柏田線整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成26年3月20日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、田宮平遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成26年10月1日から11月30日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

田宮平遺跡の調査は、平成26年10月1日から11月30日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	
	10月	11月
調査準備 表土構 撤去認	[10月1日 - 10月15日]	
遺構調査	[10月16日 - 11月15日]	
遺物洗淨 写真整理	[10月16日 - 11月15日]	
撤収	[11月16日 - 11月30日]	

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

田宮平遺跡は、茨城県牛久市田宮町字平 1030 番地ほかに所在している。

牛久市は、茨城県の南部に位置し、標高 25～28 m の洪積台地である筑波・稲敷台地と、稲荷川や小野川、乙戸川、桂川水系の沖積低地とからなっている。筑波・稲敷台地には、小野川や乙戸川、桂川とその支流が樹枝状に入り込み、台地は複雑な地形となっている。牛久市の西部を北から南へ流れる稲荷川は、小野川からつくば市内で分流し、市の西端に形成されている牛久沼に流れ込み、更に小貝川へと合流している。

筑波・稲敷台地は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積し、貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として、その上にシルト礫や軽石を含み、斜交葉理のある砂層・礫層である竜ヶ崎層、さらに粘着性の高い青灰色から灰色の火山灰質粘土層である常総粘土層、褐色の関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐食土層になっている<sup>1)</sup>。

当遺跡は、牛久市の西部、つくば市(旧荊崎町)との市境に位置し、稲荷川と小野川に挟まれた標高 20～25 m の台地上に立地している。当遺跡が立地する台地平坦部は、東西の幅が 3.7 km で、南北の長さが 1.2 km である。台地西部は、8～13 m ほどの比高をもって稲荷川の流れる沖積地に臨み、北部と南部は稲荷川左岸から小支谷が入り込んでいる。当遺跡は台地縁辺部に位置し、遺跡を囲むように入り込んでいる小支谷に向かって緩やかに傾斜している。調査前の現況は畑地である。

### 第2節 歴史的環境

田宮平遺跡(1)周辺の稲荷川左岸、牛久沼東部の低地部、当遺跡北部の稲荷川と小野川に挟まれた台地上は、古くから人々の生活が営まれてきた地域である。ここでは、『茨城県遺跡地図』<sup>2)</sup>に登録されている当該地域の主な遺跡を中心に、時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡は、当遺跡北部の台地上に点在している。守子橋遺跡(46)では石刃が表面採取され<sup>3)</sup>、当遺跡に隣接するつくば市(旧荊崎町)の五十塚古墳群(57)では、第5号墳の前方形周溝内から縦長の刃器が出土している<sup>4)</sup>。旧荊崎町で旧石器時代の存在が初めて確認された点で注目される。また、当遺跡北東部の小野川流域はナイフ形石器文化の遺跡が集中している。小野川右岸の下大井遺跡<sup>5)</sup>、小野川左岸にある下根地域のヤツノ上遺跡<sup>6)</sup>、中下根遺跡<sup>7)</sup>、西ノ原遺跡<sup>8)</sup>、俣人山遺跡<sup>9)</sup>などから石器が出土している。中でも西ノ原遺跡では、石器集中地点が5か所確認され、大型のナイフ形石器、不整形の石刃石核、楔状石器、サイド・スクレイパー、剥片、礫など約 370 点余りの石器が出土し、これらの中には良質な黒曜石が含まれている。更に、下大井遺跡や俣人山遺跡、当遺跡の南西部、牛久沼西岸の細長い台地先端部に位置する泊崎城址では、黒曜石のナイフ形石器などが出土している<sup>10)</sup>。下大井遺跡で出土した黒曜石は、信州系及び高原山産であり、当時の人々の他地域との関係を考える上で大変貴重である。これら旧石器時代の遺跡は、小野川や稲荷川沿いの小支谷付近に多くみられ、その谷沿いか谷頭近辺に多い<sup>11)</sup>。このような場所は人々が水を得るだけでなく、動物などもよく集まる場所であったので、水場は同時に狩猟場であったとも思われる<sup>12)</sup>。

縄文時代になり気候が温暖になると海進期に入り、当遺跡周辺の沖積地の多くや、牛久沼にも海水が浸入し

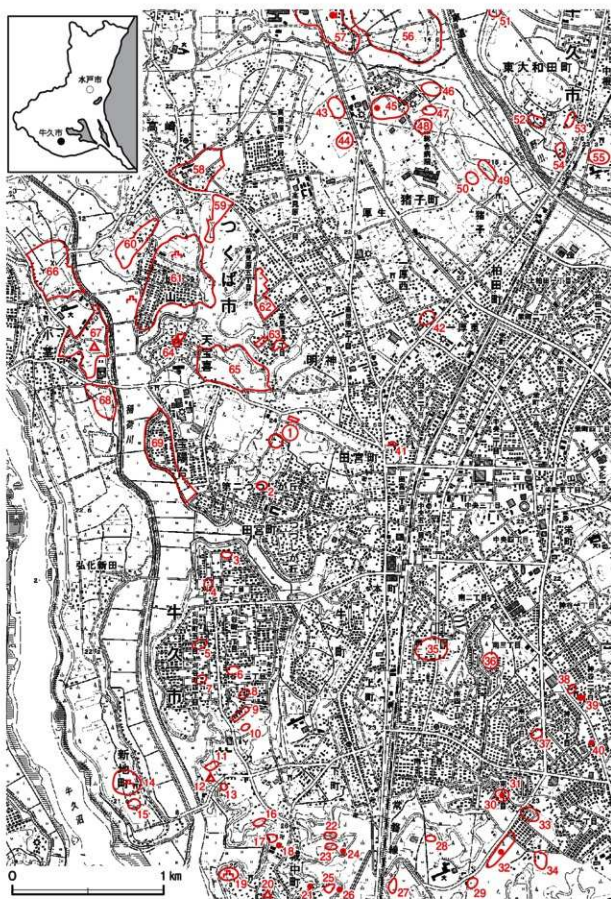
ている<sup>13)</sup>。そうした清奥、入り江沿岸に多くの集落が形成されている。当遺跡周辺では、稲荷川左岸から牛久沼東部にかけての台地縁辺部で、縄文前期から晩期の土器が表面採取されている。今回報告する田宮平遺跡では、縄文時代中・後期（大木式・五領ケ台式・称名寺式）の土器片、石斧、磨り石などを表面採集している<sup>14)</sup>。また、城中貝塚（20）では縄文早期から晩期の土器や石器、貝刃が出土している<sup>15)</sup>。当遺跡北部の小野川・稲荷川流域の天室喜貝塚（64）、天室喜C遺跡（65）、小室貝塚（67）では、縄文前期から晩期の土器が表面採取され、中でも天室喜C遺跡では、かなりの範囲で縄文中期の土器（阿玉台式・加曾利E式）の散布が見られる。また天室喜C遺跡、小室貝塚では、呪術具と考えられる土版が出土しており、縄文の人々の内面を知る資料である<sup>16)</sup>。以上のように、当遺跡周辺の台地上は、遺跡が点在しており、生活に極めて良好な空間を有していたと考えられる。

弥生時代の遺跡は、牛久沼東岸と牛久市東部の河川流域で確認されている。当遺跡周辺では、小馬塚台遺跡（22）と中ノ台B遺跡で弥生時代後期の土器片が表面採取されている<sup>17)</sup>。

古墳時代の遺跡は、市北部下根東端穴地区のヤツノ上遺跡、中久喜遺跡<sup>18)</sup>、東山遺跡<sup>19)</sup>、馬場遺跡<sup>20)</sup>、行人田遺跡<sup>21)</sup>、中下根遺跡、西ノ原遺跡、華人山遺跡で、古墳時代中期の集落跡が確認され、古墳時代中期に突如いくつもの大集落が形成される様子が伺える。また、大明神西遺跡（11）では、古墳時代前期から後期の土師器片が採集されている<sup>22)</sup>。古墳時代の遺跡は、大部分が河川あるいは河川から入り込んでいる支谷に面した舌状台地上や台地縁辺部に存在している。このことは水田を経営していた河川の後背湿地や、谷津に面した高燥の地を選んだことによると思われる<sup>23)</sup>。

奈良・平安時代の当地域は、「和名類聚抄」によると、河内郡に属し、当遺跡は河内郡河内郷に比定されている<sup>24)</sup>。当時代の遺跡は、河川流域や河川に挟まれた台地上に分布している。当遺跡の北東部下根地域の馬場遺跡、行人田遺跡、東山遺跡、華人山遺跡、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡、ヤツノ上遺跡と小野川を挟んだ対岸の下大井遺跡で、8世紀初頭から10世紀代の竪穴建物跡が確認されている。行人田遺跡では、9世紀初頭の竪穴建物跡から井ヶ谷78号窯式の灰軸陶器長頸瓶が、ヤツノ上遺跡では、平安時代初頭の竪穴建物跡から猿投窯産とされる灰軸陶器短頸壺が出土している。更に、ヤツノ上遺跡で確認された平安時代の掘立柱建物跡の7種のうちの1種は、仏堂と思われる2×2間の掘立柱建物跡が検出され、この掘立柱建物跡の周囲の竪穴建物跡からは「佛」と書かれた墨書土器や灯明皿に使用された坏、鉢鉢が出土している。また、下大井遺跡からも、身舎4間×2間で四面に庇が付く掘立柱建物跡が検出されている。建物跡の形状から仏堂的な建物で村落内寺院であった可能性が想定される<sup>25)</sup>。8世紀後葉と9世紀後葉の竪穴建物跡からは、「上寺」・「×寺」と書かれた墨書土器、瓦塔片、灯明具として使用された坏、須恵器円面硯、鉄鉢形土器などが出土している。これらのことから、8世紀の後葉から9世紀代に当地域内にも仏教が浸透していたことが想定される<sup>26)</sup>。また、稲荷川右岸から牛久沼東部にかけての一本榎遺跡（10）、大明神西遺跡、稲荷台遺跡（16）では、土師器片・須恵器片が表面採取されているが、集落跡は確認されていない<sup>27)</sup>。更に、当時は河川や湖沼、海上を利用した水上交通の利用も盛んに行われていたと考えられている。平安時代になると、牛久市東部の龍ヶ崎市と、稲敷市（旧江戸崎市）との市境を、古代官道「東海大道」が小野川を横切るように通っていたと推定されている<sup>28)</sup>。当遺跡は小野川・稲荷川に挟まれており、陸路だけでなく、霞ヶ浦や牛久沼などを經由し川をさかのぼり、様々な物資がもたらされた可能性もある。

鎌倉時代になると河内郡は、公領の河内郡と大井荘に分かれ、当遺跡周辺は公領河内郡に含まれる<sup>29)</sup>。その後、南北朝から室町時代にかけて、当地域は小田氏の支配下となる。その後小田氏一族の岡見氏が台頭し、当遺跡から南へ約3.5kmほどにある牛久城を居城とし、当地域を支配していく。岡見氏の支城として、当遺跡周辺では



第1図 田宮平遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000分の1「牛久」)

表1 田宮平遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	田宮平遺跡	○	○			○	○		36	牛久遺跡		○		○			
2	笹塚遺跡		○						37	貝塚台遺跡		○					
3	石瓦遺跡		○						38	河原代遺跡		○					
4	刈谷古墳				○				39	蛇喰遺跡				○			
5	城中A遺跡		○		○				40	貝塚台古墳		○		○			
6	六万部A遺跡				○				41	田宮一里塚							○
7	六万部B遺跡				○				42	前山久保遺跡				○			
8	刈谷遺跡				○				43	山際A遺跡		○					
9	梶窪遺跡				○				44	山際B遺跡		○					
10	一本榎遺跡		○		○				45	道山古墳群				○			
11	大明神西遺跡		○		○				46	守子橋遺跡				○			
12	新地貝塚		○		○				47	坂本遺跡		○					
13	水井神台遺跡		○		○				48	道山下遺跡				○			
14	東林寺城跡		○		○		○		49	稲荷下遺跡				○			
15	身上遺跡		○		○				50	古屋敷遺跡				○			
16	稲荷台遺跡		○						51	坂本遺跡		○					
17	谷田部宿遺跡		○						52	塚原山古墳群				○			
18	愛宕神社古墳				○				53	中宿遺跡				○			
19	陣屋城跡							○	54	根柄遺跡		○		○			
20	城中貝塚		○						55	小屋前遺跡				○			
21	水神塚古墳				○				56	大井遺跡		○		○	○	○	○
22	小馬様台遺跡		○		○				57	五十塚古墳群		○		○			
23	山王前遺跡		○		○				58	郷中塚古墳群				○			
24	山王塚古墳				○				59	高見原A遺跡		○					○
25	明神遺跡		○		○		○		60	孝学院遺跡		○				○	
26	明神塚古墳群				○				61	高崎城跡				○	○	○	○
27	東城台遺跡		○		○				62	高美原B遺跡		○		○			
28	向台遺跡		○		○				63	高見原番外遺跡		○	○	○			
29	鳳王前B遺跡		○		○				64	天寶喜貝塚		○				○	○
30	甲塚遺跡		○		○				65	天寶喜C遺跡		○	○	○		○	○
31	甲塚古墳				○				66	小荃北遺跡		○		○		○	○
32	桜塚古墳群				○				67	小荃貝塚		○			○	○	○
33	藤窪遺跡		○						68	小荃南遺跡		○		○	○	○	○
34	衛門廊遺跡				○				69	天寶喜西遺跡		○					○
35	富士塚古墳		○														

稲荷川左岸に東林寺城(14)、高崎城がある。戦国期、当地域は北条・岡見氏と反対勢力の佐竹・多賀谷氏が激しく対立した境目であり、戦国末期に至るまで合戦のやむことのない地域であった<sup>30)</sup>。

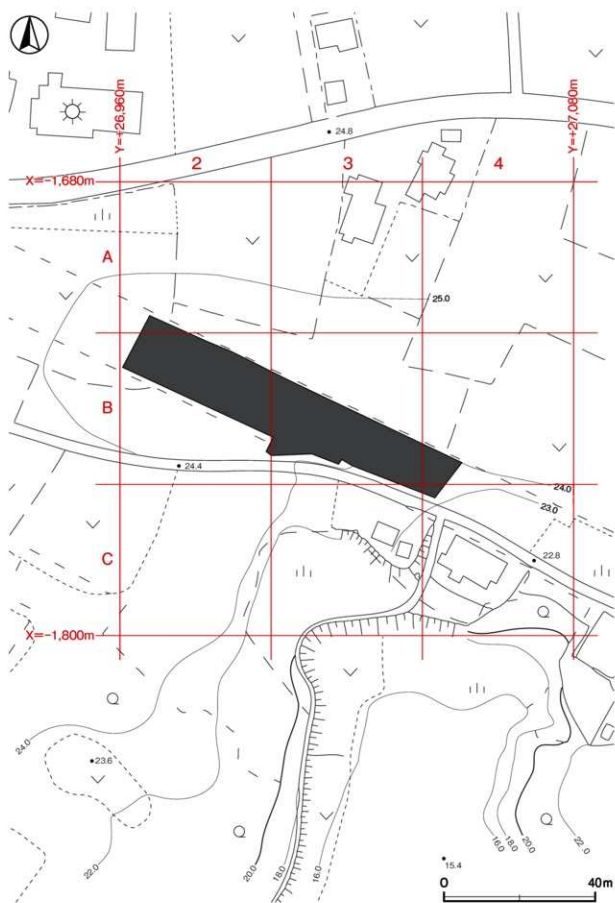
近世になると、当地域は牛久藩となり稲荷川左岸に陣屋が置かれ<sup>31)</sup>、現在は陣屋城跡(19)として掘や土

型が残り、当時の面影を偲ぶことができる。

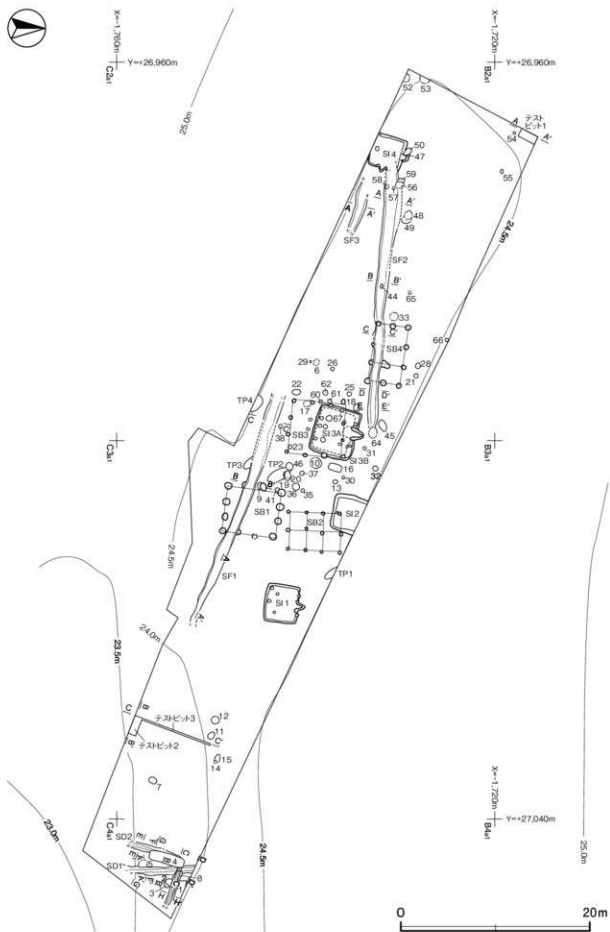
※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び第1表の該当番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図 地図編』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 牛久市史編さん委員会『牛久市史料 原始・古代-考古資料編-』牛久市 1999年8月
- 4) 基崎町史編さん委員会『基崎町史』基崎町 1994年3月
- 5) a 川津法典「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1 下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集 2001年3月  
b 島田和宏「下大井遺跡2 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第197集 2003年3月
- 6) 小高五十二「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ） ヲツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集 1993年3月
- 7) 深谷憲二・柴田博行「牛久東下根特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡・西ノ原遺跡・華人山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第113集 1996年6月
- 8) 註7に同じ
- 9) 註7に同じ
- 10) 註4に同じ
- 11) 註3に同じ
- 12) 茨城県史編集委員会『茨城県史 原始古代編』茨城県 1985年3月
- 13) 註3に同じ
- 14) 註3に同じ
- 15) 牛久市史編さん委員会『牛久市史 原始古代中世』牛久市 2004年3月
- 16) 註4に同じ
- 17) 註15に同じ
- 18) 荒井保雄「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ） 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 1993年9月
- 19) 松浦敏「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ） 東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第101集 1995年9月
- 20) 白田正子「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ） 馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集 1996年3月
- 21) 註20に同じ
- 22) 註3に同じ
- 23) 註15に同じ
- 24) 中山信名著 栗田寛補訂『新編常陸国誌』宮崎報恩会 1969年
- 25) 川井正一「基崎町下大井遺跡」『研究ノート』11号 茨城県教育財団 2002年6月
- 26) 註15に同じ
- 27) 註3に同じ
- 28) 註15に同じ
- 29) 註15に同じ
- 30) 註15に同じ
- 31) 註15に同じ



第2図 田宮平遺跡調査区設定図(牛久市都市計画図2,500分の1)



第3図 田宮平遺跡遺構全体図



## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

田宮平遺跡は、牛久市の西部に位置し、牛久沼東岸に流入する稲荷川左岸の標高約23～24mの台地斜面部に立地している。調査面積は1,362㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、竪穴建物跡4棟（奈良・平安時代）、掘立柱建物跡4棟（平安時代1、室町時代1、時期不明2）、溝跡2条（時期不明）、道路跡3条（時期不明）、陥し穴4基（縄文時代）、土坑58基（縄文時代2、奈良・平安時代2、室町時代1、時期不明53）、石器集中地点1か所（旧石器時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に8箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（甕・瓶）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・甕・瓶）、土師質土器（内耳鍋）、灰釉陶器（長頸瓶）、土製品（支脚・スタンプ形土製品）、石器（尖頭器・搔器・削器・鏃・砥石）、石核、剥片、金属製品（刀子・釘）、輪形漆などである。

### 第2節 基本層序

調査区西部（B12区）にテストピット1を、南東部（B38区）と（B3h9～B38区）にテストピット2・3を設定し、基本土層（第4図）の観察を行った。以下、観察結果に基づき層序を説明する。

第1層は、黒褐色の耕作土である。層厚は6～32cmである。

第2層は、褐色の旧耕作土である。層厚は18～28cmである。

第3層は、灰黄褐色のソフトローム層への漸移層である。ローム粒子を中量含み、粘性・締まりとも普通で、層厚は5～12cmである。

第4層は、にぶい黄褐色のソフトローム層である。締まりが強く、層厚は5～22cmである。

第5層は、にぶい黄褐色のハードローム層への漸移層である。締まりが強く、層厚は10～20cmである。

第6層は、黄褐色のハードローム層である。白色粒子を少量、黒色粒子を微量含み、締まりが極めて強く、層厚は5～15cmである。

第7層は、明黄褐色のハードローム層である。白色粒子・橙色粒子を微量含み、締まりが極めて強く、層厚は20～38cmである。

第8層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。白色粒子を少量、黒色粒子を微量含み、締まりが極めて強く、層厚は16～22cmである。

第9層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み、締まりが極めて強く、層厚は14～22cmである。

第10層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。黒色粒子を微量含み、締まりが強く、層厚は20～25cmである。

第11層は、黄褐色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み、締まりが極めて強く、層厚は2～45cmである。

第12層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み、締まりが極めて強く、

層厚は16～25cmである。

第13層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子を微量含み、締まりが極めて強く、層厚は10～30cmである。

第14層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。浅黄橙色軽石を微量含み、締まりが極めて強く、層厚は12～34cmである。

第15層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。粘土小ブロック・浅黄橙色軽石を微量を含み、締りが強く、層厚は30cm以上である。

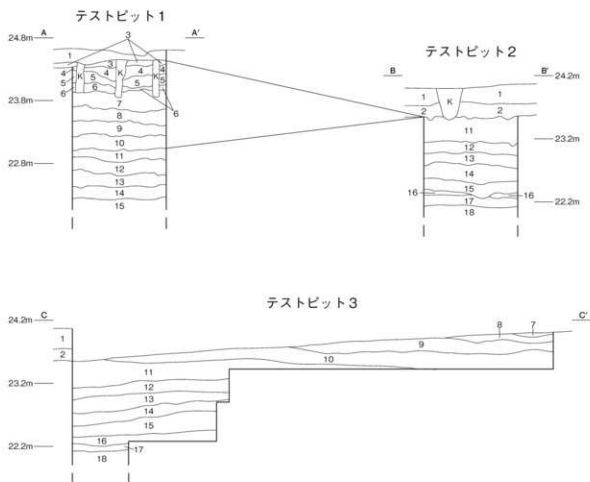
第16層は、にぶい黄褐色の粘土層への漸移層である。粘土小ブロックを中量、浅黄橙色軽石を少量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は2～15cmである。

第17層は、暗灰黄色の粘土層である。黒色粒子・橙色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は10～15cmである。

第18層は、灰白色の常総粘土層である。黒色粒子・橙色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。

なお、テストピット1の第15層の下層とテストピット2・3の第18層の下層は、いずれも未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は、西部から中央部においては第3層の上面、東部では第7層の上面で確認した。



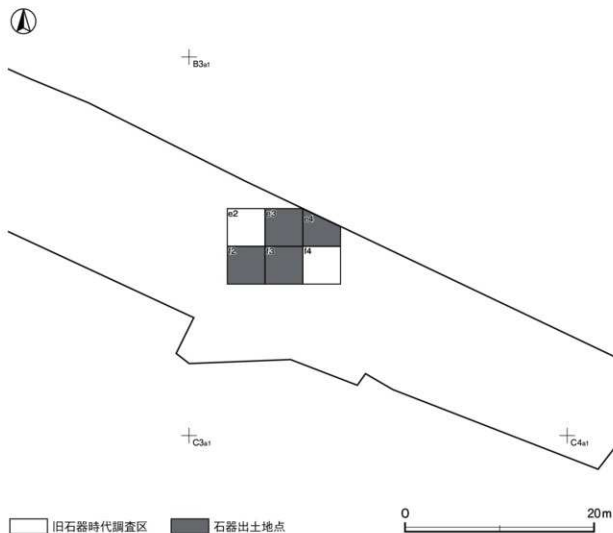
第4図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 旧石器時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、石器集中地点1か所を確認した。調査は、石器が採取できた地点に4m四方のグリッドを設定し、調査範囲を拡張しながらローム層の掘削を行った。調査区は南北8m、東西12mで、調査面積は96㎡である。

出土した石器類の総数は、84点である。出土した石器類すべてに通し番号を付し、観察表を掲載した。石器及び二次調整剥片、特徴的な剥片については実測図を掲載し、実測番号を観察表の備考欄に記載した。



第5図 旧石器時代調査区設定図

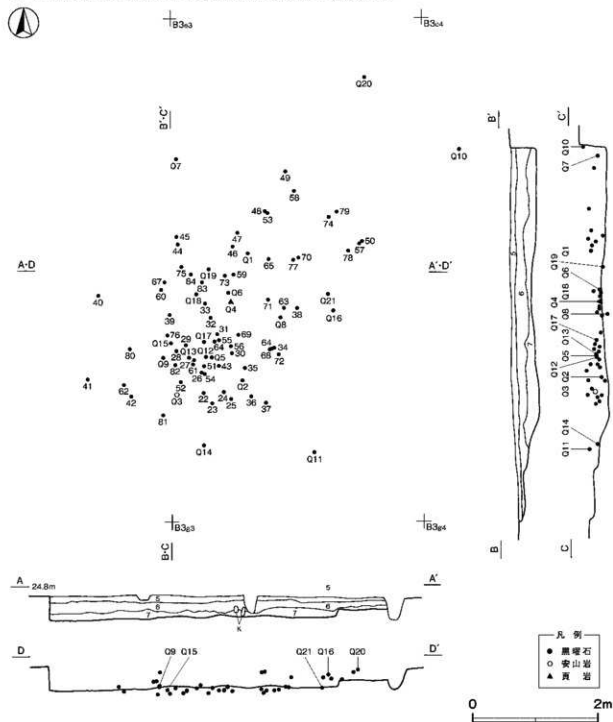
石器集中地点

第1号石器集中地点（第6～8図）

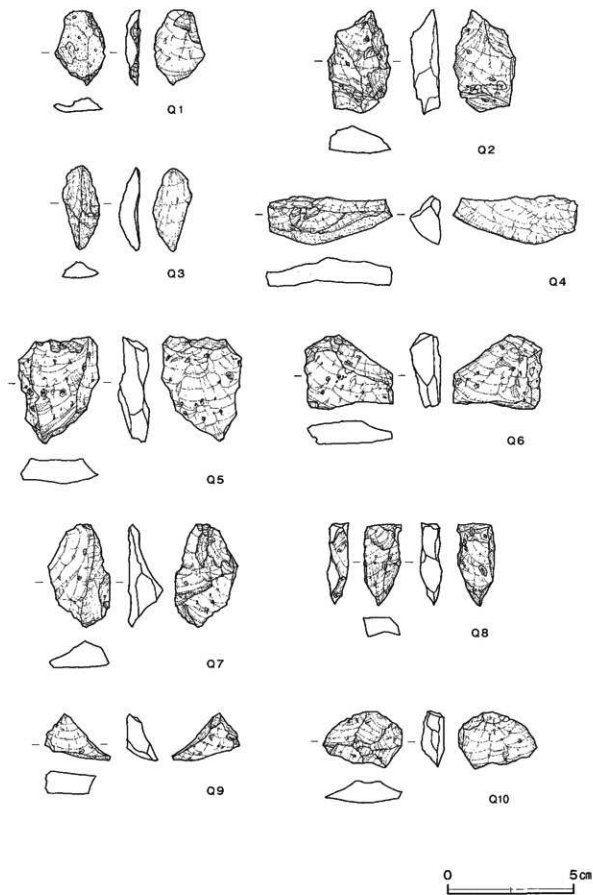
位置 調査区のB 3e3～B 3e4区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

遺物出土状況 搔器1点（黒曜石）、削器1点（黒曜石）、二次調整剥片1点（安山岩）、剥片81点が、基本層序の第5層（ハードローム層漸移層）、第6・7層（ハードローム層）から出土している。石材は、安山岩1点、頁岩1点、黒曜石82点である。

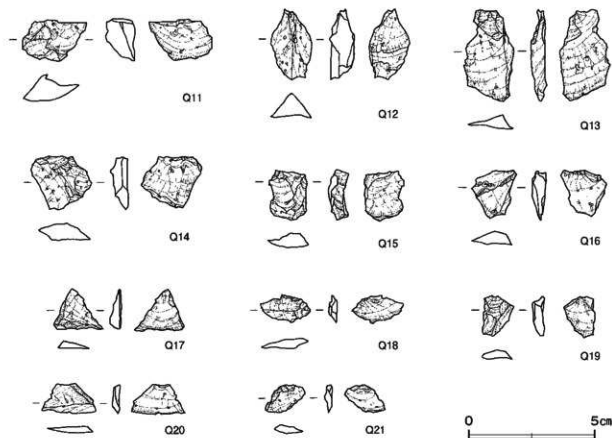
所見 時期は、出土層位から後期旧石器時代に比定できる。出土石器類の大部分が黒曜石の剥片であることから、小振りな母岩から製品を作った石器製作跡であったと考えられる。



第6図 第1号石器集中地点石器分布図



第7图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(1)



第8図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(2)

第1号石器集中地点出土遺物観察表(第7・8図)

番号	器種	長さ	幅	厚心	重量	材質	特徴	出土位置	標高	備考
1	掻器	3.1	2.0	0.7	5.18	黒曜石	縦長割片を素材とし、主要剥離面側からの鋭角度の調整をほぼ完全に施す。	B 3e3	24.441	Q 1 Pl. 8・10
2	刮器	4.1	2.6	1.2	9.70	黒曜石	縦長割片を素材とし、上部に主要剥離面側からの連続した鋭角度の調整を施す。打面、割片下部及び左縁を欠く。	B 3f3	24.279	Q 2 Pl. 8・10
3	二次調整割片	3.3	1.5	0.8	2.71	安山岩	2次加工を有する割片。縦長割片の1側縁の一部に細かい調整を施す。	B 3f3	24.407	Q 3 Pl. 8・10
4	割片	1.4	5.0	1.2	9.98	頁岩	横長割片。背面に前段階の前縁の同一方向の剥離面を有する。割片の右側縁を欠く。打面は後剥離面。	B 3f3	24.283	Q 4 Pl.10
5	割片	4.2	3.2	1.2	14.28	黒曜石	縦長割片。背面に前段階の同一方向からの剥離面を有する。上部部に自然面を残し打面は後剥離面。	B 3f3	24.327	Q 5 Pl.10
6	割片	3.0	3.5	1.2	10.66	黒曜石	横長割片。打面は縦長割片であるが、割片の右側を主要剥離面からの割片によって形成している。打面は半剥離面一部に剥離を残す。	B 3f3	24.283	Q 6 Pl.10
7	割片	4.1	2.5	1.4	8.05	黒曜石	縦長割片。背面に前段階の前縁面と自然面を残し、主要剥離面は打点付近の縁側に細かい調整を施す。下部に右側縁面を残す。	B 3e3	24.307	Q 7 Pl.10
8	割片	3.3	1.5	0.8	4.16	黒曜石	縦長割片。打面は半剥離面。割片の左右側縁を欠く。	B 3f3	24.196	Q 8 Pl.10
9	割片	2.6	1.6	1.3	3.88	黒曜石	横長割片。下部は右側縁面の自然面を残す。背縁面からの加工によって割片の右側を欠く。	B 3f2	24.320	Q 9 Pl.10
10	割片	2.3	3.1	0.9	3.48	黒曜石	横長割片。背面に前段階の多方向の剥離面。打面は後剥離面。	B 3e4	24.549	Q 10 Pl.10
11	割片	1.7	2.5	1.2	3.23	黒曜石	横長割片。打面は後剥離面。背面に前段階の多方向の剥離面。	B 3f3	24.470	Q 11
12	割片	2.8	1.6	1.0	3.19	黒曜石	縦長割片。両面に前段階の前縁面。主要剥離面側からの加工によって割片の右側を欠く。	B 3f3	24.336	Q 12
13	割片	3.6	2.0	0.6	3.05	黒曜石	縦長割片。背面に前段階の同一方向の前縁面。打面側からの加工によって割片の右側を欠く。ナイフ形打石の素材。	B 3f3	24.326	Q 13 Pl.10
14	割片	2.3	2.1	0.9	2.74	黒曜石	横長割片。打面は後剥離面。背面に前段階の多方向の剥離面。主要剥離面側からの加工により、割片の右側を欠く。	B 3f3	24.291	Q 14
15	割片	2.0	1.6	0.8	2.08	黒曜石	縦長割片。打面及び割片の下部に、右側縁部を欠く。背面に前段階の多方向の剥離面を残す。	B 3f2	24.218	Q 15
16	割片	1.9	1.8	0.6	1.79	黒曜石	縦長割片。背面に前段階の前縁面を残し、割片の両側縁部を主要剥離面からの加工により欠く。打面は後剥離面。横長割片。背面に前段階の前縁面と、その下部に右側縁面を有する。背縁面からの加工により割片の左側を欠く。	B 3f3	24.459	Q 16
17	割片	1.9	1.7	0.5	0.88	黒曜石	縦長割片。背面に主要剥離面の打撃方向に直行方向の前段階の前縁面の剥離面を有する。	B 3f3	24.360	Q 17
18	割片	1.2	1.9	0.4	0.72	黒曜石	横長割片。背面に主要剥離面の打撃方向に直行方向の前段階の前縁面の剥離面を有する。	B 3f3	24.363	Q 18
19	割片	1.6	1.3	0.5	0.54	黒曜石	縦長割片。背面に多方向の前段階の剥離面を有する。	B 3e3	24.240	Q 19
20	割片	1.2	2.1	0.3	0.52	黒曜石	横長割片。背面に前段階の前縁面と自然面を残す。打面は半剥離面。	B 3e3	24.545	Q 20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	標高	備考
21	銅片	1.7	1.0	0.4	0.48	黒曜石	横長銅片。背面は主要剥離面の打撃方向と直交方向の前段階の剥離面。打痕は縦剥離面	B 3/3	24250	Q 21
22	銅片	1.9	1.3	0.4	0.85	黒曜石	背面に自然面残存	B 3/3	24462	
23	銅片	1.3	0.8	0.5	0.34	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24420	
24	銅片	1.5	0.7	0.2	0.12	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24458	
25	銅片	1.8	1.4	0.5	0.63	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24378	
26	銅片	0.2	0.1	0.2	0.14	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24566	
27	銅片	1.2	1.0	0.4	0.14	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24332	
28	銅片	1.3	0.8	0.3	0.78	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24399	
29	銅片	0.9	0.9	0.2	0.10	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24377	
30	銅片	1.2	0.6	0.4	0.19	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24347	
31	銅片	1.0	0.7	0.3	0.17	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24287	
32	銅片	1.4	0.9	0.2	0.21	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24293	
33	銅片	0.9	0.9	0.2	0.12	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24340	
34	銅片	0.6	0.5	0.4	0.10	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24397	
35	銅片	1.1	0.5	0.3	0.08	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24311	
36	銅片	1.0	0.8	0.2	0.12	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24329	
37	銅片	1.2	0.6	0.3	0.11	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24361	
38	銅片	1.2	1.1	0.2	0.22	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24310	
39	銅片	1.2	0.9	0.4	0.35	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/2	24411	
40	銅片	1.3	0.9	0.6	0.56	黒曜石	背面に自然面残存	B 3/2	24291	
41	銅片	1.3	1.1	0.3	0.41	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/2	24567	
42	銅片	1.5	0.6	0.4	0.29	黒曜石	背面に自然面残存	B 3/2	24561	
43	銅片	1.1	0.9	0.6	0.57	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24351	
44	銅片	1.6	1.2	0.6	0.68	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/e3	24361	
45	銅片	1.2	0.9	0.2	0.15	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/e3	24246	
46	銅片	0.9	0.9	0.5	0.18	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/e3	24478	
47	銅片	1.3	1.0	0.2	0.30	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/e3	24439	
48	銅片	1.2	0.7	0.2	0.11	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/e3	24528	
49	銅片	1.0	0.8	0.3	0.22	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/e3	24384	
50	銅片	1.1	0.7	0.2	0.10	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/e3	24535	
51	銅片	1.0	0.8	0.4	0.17	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24486	
52	銅片	0.7	0.6	0.2	0.06	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24249	
53	銅片	1.6	0.9	0.2	0.18	黒曜石	自然面残存	B 3/e3	24525	
54	銅片	0.4	0.2	0.01	0.01未満	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24274	
55	銅片	1.8	1.0	0.7	0.35	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24242	
56	銅片	1.0	0.4	0.1	0.03	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24248	
57	銅片	0.7	0.7	1.6	0.05	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/e3	24505	
58	銅片	0.9	0.6	0.7	0.11	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/e3	24290	
59	銅片	1.1	0.8	0.2	0.09	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24297	
60	銅片	0.9	0.6	0.2	0.12	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/2	24377	
61	銅片	0.6	0.4	0.01	0.01未満	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24223	
62	銅片	1.2	0.8	0.2	0.12	黒曜石	自然面残存	B 3/2	24289	
63	銅片	0.7	0.6	0.1	0.02	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24231	
64	銅片	1.5	1.3	0.3	0.58	黒曜石	背面に前段階の剥離痕	B 3/3	24199	
65	銅片	1.0	0.7	0.2	0.23	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/e3	24543	
66	銅片	0.9	0.4	0.2	0.05	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24238	
67	銅片	2.0	1.3	0.3	0.45	黒曜石	自然面残存	B 3/2	24555	
68	銅片	1.2	0.7	0.2	0.11	黒曜石	剥離作業時に生じた残骸	B 3/3	24222	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	標高	備考
69	湖片	1.0	0.7	0.3	0.11	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3c3	24245	
70	湖片	1.0	0.6	0.4	0.14	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3e3	24470	
71	湖片	1.8	1.4	0.4	0.50	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3c3	24250	
72	湖片	1.6	1.1	0.2	0.29	黒曜石	背面に前段階の湖摩痕	B 3c3	24232	
73	湖片	1.1	0.3	0.1	0.05	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3c3	24259	
74	湖片	1.0	0.9	2.0	0.19	黒曜石	背面に前段階の湖摩痕	B 3e3	24441	
75	湖片	0.8	0.7	0.2	0.05	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3e3	24271	
76	湖片	1.1	0.8	0.3	0.13	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3c2	24344	
77	湖片	0.5	0.5	1.0	0.01	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3e3	24283	
78	湖片	0.9	0.8	0.2	0.11	黒曜石	自然面残存	B 3e3	24402	
79	湖片	0.8	0.7	0.4	0.17	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3e3	24430	
80	湖片	1.4	0.6	0.1	0.08	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3c2	24257	
81	湖片	0.6	0.2	0.3	0.01	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3c2	24183	
82	湖片	0.7	0.7	0.3	0.10	黒曜石	湖摩作業時に生じた残骸	B 3c3	24196	
83	湖片	1.7	0.9	0.3	0.49	黒曜石	自然面残存	B 3c3	24234	
84	湖片	1.2	0.8	0.2	0.11	黒曜石	自然面残存	B 3c3	24193	

## 2 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴4基、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

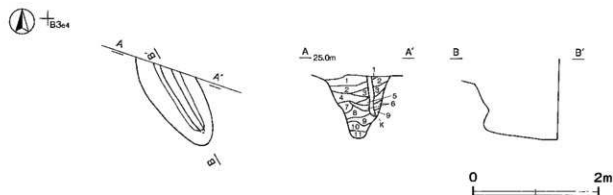
### (1) 陥し穴

#### 第1号陥し穴（第9図）

**位置** 調査区中央部のB 3e4区、標高24 mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 北部が調査区域外に延びているため、北西・南東径は1.48 m、北東・南西径は0.78 mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ、長径方向はN-32°-Wと推測できる。深さは90～100cmで、底面は南東側から中央部に向かって傾斜している。北東・南西径の断面はU字状を呈している。南東壁は内彎して立ち上がり、くびれ部から外傾している。底面からくびれ部までの高さは、30cmである。

**覆土** 11層に分層できる。多くの層にロームブロックや、黒色土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。



第9図 第1号陥し穴実測図



土層解説

- |         |                      |          |                      |
|---------|----------------------|----------|----------------------|
| 1 灰黄褐色  | ローム粒子中量, 黒色土ブロック少量   | 7 黄褐色    | ロームブロック中量, 黒色土ブロック微量 |
| 2 にい黄褐色 | ローム粒子中量, 黒色土ブロック微量   | 8 灰黄褐色   | ローム粒子多量, 黒色土ブロック微量   |
| 3 灰黄褐色  | ロームブロック・黒色土ブロック少量    | 9 暗褐色    | ロームブロック中量, 黒色土ブロック微量 |
| 4 にい黄褐色 | ロームブロック少量, 黒色土ブロック微量 | 10 にい黄褐色 | ローム粒子多量, 黒色土ブロック微量   |
| 5 黄褐色   | ロームブロック少量            | 11 黒褐色   | ローム粒子少量, 黒色土ブロック微量   |
| 6 にい黄褐色 | 黒色土ブロック中量, ロームブロック少量 |          |                      |

所見 時期は, 出土遺物がないため明確ではないが, 形状から縄文時代と考えられる。

第2号陥し穴 (第10図)

位置 調査区中央部のB3f1区, 標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第19・20・46号土坑に掘り込まれている。

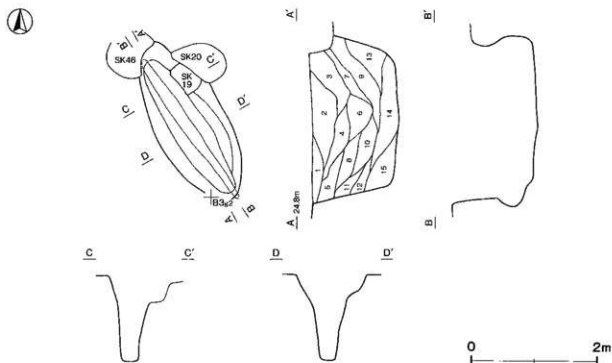
規模と形状 長径2.70m, 短径1.14mの楕円形で, 長径方向はN-28°-Wである。深さは134cmで, 底面はほぼ平坦である。短径の断面はU字状を呈している。長径壁は内彎して立ち上がり, 北西壁はくびれ部から外傾し, 南東壁はくびれ部から直立している。底面からくびれ部までの高さは, 北壁が75cm, 南壁が40cmである。

覆土 15層に分層できる。ロームブロックや, 黒色土ブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- |         |                      |          |                         |
|---------|----------------------|----------|-------------------------|
| 1 にい黄褐色 | ローム粒子中量              | 9 褐灰色    | 黒色土ブロック少量, ロームブロック微量    |
| 2 灰黄褐色  | ローム粒子中量              | 10 褐色    | ロームブロック・黒色土ブロック少量       |
| 3 にい黄褐色 | ロームブロック少量, 褐色粒子微量    | 11 にい黄褐色 | ローム粒子多量, 黒色土ブロック微量      |
| 4 にい黄褐色 | ロームブロック中量, 褐色粒子微量    | 12 にい黄褐色 | ローム粒子多量, 黒色土ブロック少量      |
| 5 にい黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック微量    | 13 褐灰色   | 砂粒少量, ロームブロック・黒色土ブロック微量 |
| 6 褐灰色   | ロームブロック・黒色土ブロック少量    | 14 灰黄褐色  | ロームブロック・黒色土ブロック・砂粒少量    |
| 7 にい黄褐色 | ロームブロック中量, 黒色土ブロック微量 | 15 にい黄褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック・砂粒少量    |
| 8 にい黄褐色 | 黒色土ブロック・ローム粒子微量      |          |                         |

所見 時期は, 出土遺物がないため明確ではないが, 形状から縄文時代と考えられる。



第10図 第2号陥し穴実測図

### 第3号陥し穴（第11図）

**位置** 調査区中央部のB3g1区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1号道路に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径2.66m、短径0.85mの楕円形で、長径方向はN-36°-Wである。深さは110cmで、底面はほぼ平坦である。短径の断面はU字状を呈している。長径壁は内側で立ち上がり、北西壁はくびれ部から直立し、南東壁はくびれ部から外傾している。底面からくびれ部までの高さは、北西壁が40cm、南東壁が25cmである。

**ピット** 2か所。P1は径15cm、深さ34cm、P2は径12cm、深さ22cmである。逆茂木が立てられていた痕跡の可能性はある。

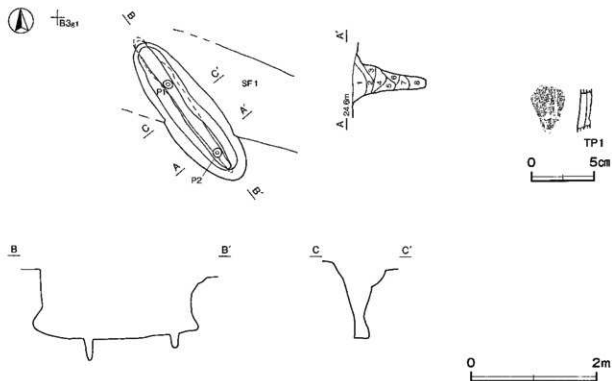
**覆土** 8層に分層できる。ロームブロックや黒色土ブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |          |                     |          |           |
|----------|---------------------|----------|-----------|
| 1 灰黄褐色   | ロームブロック少量・黒色土ブロック微量 | 5 黄灰色    | ロームブロック少量 |
| 2 におい黄褐色 | ローム粒子中量・黒色土ブロック微量   | 6 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 におい黄褐色 | ロームブロック少量・黒色土ブロック微量 | 7 におい黄褐色 | ローム粒子多量   |
| 4 におい黄褐色 | ロームブロック中量・黒色土ブロック微量 | 8 灰黄褐色   | ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 縄文土器片1点（深鉢）が出土している。TP1は、埋め戻す過程で混入したものと思われる。

**所見** 時期は、出土土器や形状から縄文時代中期中葉と考えられる。



第11図 第3号陥し穴・出土遺物実測図

第3号陥し穴出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	前面三角形の微隆起をもつ	覆土中	

#### 第4号陥し穴（第12図）

**位置** 調査区中央部のB2g0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

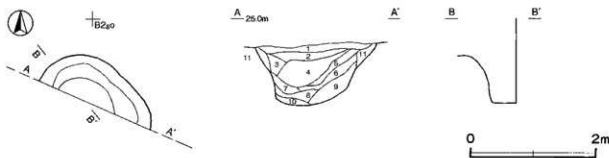
**規模と形状** 南部が調査区外に延びているため、北西・南東径は1.90m、北東・南西径は0.72mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ、長径方向はN-66°-Wと推測できる。深さは98cmで、底面は平坦である。北西・北東壁は緩やかに外傾している。

**覆土** 11層に分層できる。第1層はローム粒子を含む自然堆積層である。第2～11層はロームブロックや黒色土ブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

##### 土層解説

- |          |                     |        |                     |
|----------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子微量             | 7 明黄褐色 | ロームブロック少量           |
| 2 に深い黄褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量        | 8 褐色   | ロームブロック少量           |
| 3 褐色     | ロームブロック微量           | 9 明黄褐色 | 黒色土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 4 に深い黄褐色 | ロームブロック少量           | 10 黄褐色 | ロームブロック少量           |
| 5 に深い黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | 11 黄褐色 | ロームブロック微量           |
| 6 黄褐色    | ロームブロック・黒色土ブロック微量   |        |                     |

**所見** 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第12図 第4号陥し穴実測図

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
1	B3e4	N-32°-W	[楕円形]	(1.48) × (0.78)	90~100	平坦	内壁・外壁	人為		
2	B3f1	N-28°-W	[楕円形]	(2.70) × 1.14	134	平坦	内壁・外壁・直立	人為		本誌→SK19・20・46
3	B3g1	N-36°-W	[楕円形]	(2.66) × (0.85)	110	平坦	内壁・外壁・直立	人為	縄文土器	本誌→SF1
4	B2g0	N-66°-W	[楕円形]	(1.90) × (0.72)	98	平坦	外傾	人為		

#### (2) 土坑

##### 第6号土坑（第13図）

**位置** 調査区のB2e8区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 上部と底部が攪乱を受けており、北西・南東径0.68m、北東・南西径0.56mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ、長径方向はN-68°-Wと推測できる。深さは26cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。両層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

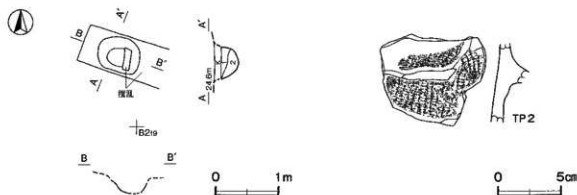
**土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 縄文土器片1点(深鉢)が覆土上層から出土している。TP2は、埋め戻す過程で混入したものと思われる。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期と考えられる。



第13図 第6号土坑・出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	0段多糸縄文R L→縄文磨消→把手貼付	覆土中	PL9

**第36号土坑(第14図)**

**位置** 調査区のB3区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長径0.78m、短径0.76mの円形である。深さは28cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

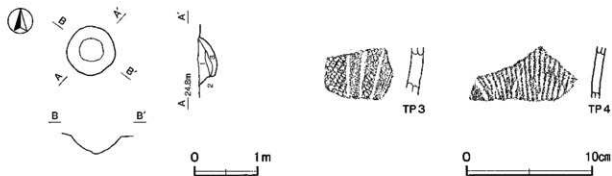
**覆土** 3層に分層できる。第2・3層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1層は、第2・3層が埋まった後の窪地に流れ込んだ層である。

**土層解説**

1 褐色 ローム粒子微量

3 黄褐色 ロームブロック中量

2 にぶい黄褐色 ロームブロック少量



第14図 第36号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 縄文土器片5点(深鉢)が覆土中から出土している。TP 3・TP 4は、埋め戻す過程で混入したと思われる。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

第36号土坑出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単踏縄文RL→沈瀬間朝酒	覆土中	PL 9
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄褐色	無踏縄文→一部朝酒	覆土中	

表3 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
6	B 2e8	N - 68° - W	[楕円形]	(0.68) × (0.56)	26	皿状	織斜	人為	縄文土器	
36	B 3d2	-	円形	0.78 × 0.76	28	皿状	織斜	人為	縄文土器	

### 3 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡4棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

#### (1) 竪穴建物跡

##### 第1号竪穴建物跡(第15・16図)

**位置** 調査区中央部のB 3 f5区、標高24 mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸3.97 m、短軸3.55 mの方形で、主軸方向はN - 8° - Eである。壁高は3 - 12 cmで、外傾している。北壁には粘土が貼り付けられている。

**床** 平坦な貼床で、東西壁際を除いて踏み固められている。南西コーナー部は地山を掘り残し、2 - 5 cmほど高くなっている。貼床は、第11層を2 - 10 cmほど埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

**竪** 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで130 cmで、燃焼部幅は45 cmである。全体を楕円形に床面から20 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックや粘土ブロックを含んだ第9・10層を埋土して構築されている。袖部は、地山の上に締まりの強いロームブロックや粘土ブロックを含んだ第6 - 8層を積み上げて構築されている。燃焼部及び煙道部は壁外に75 cm掘り込まれ、火床部から外傾している。

#### 遺土層解説

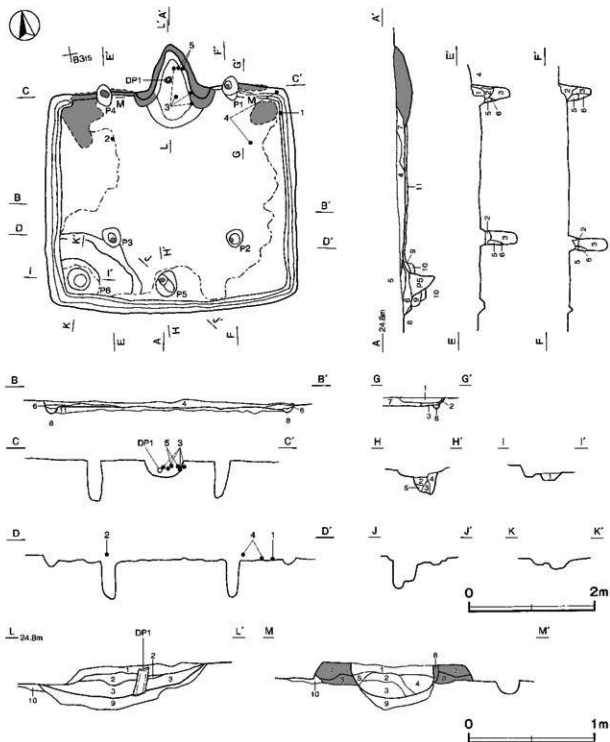
1 灰黄褐色	砂質粒子中量、焼土粒子微量	6 灰赤色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子少量
2 暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粒子微量	7 赤灰色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8 赤灰色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量
4 にい黄褐色	焼土ブロック・砂質粒子中量、炭化粒子微量	9 にい黄褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量
5 暗褐色	砂質粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	10 にい黄褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ48～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ44cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ10cmで性格は不明である。第1～4層は柱抜き取り後の堆積層、第5・6層は埋土である。

ピット土層解説 (P1～P6共通)

- 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 に近い黄褐色 ロームブロック少量

- 4 黄褐色 ローム粒子多量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 に近い黄褐色 ロームブロック少量



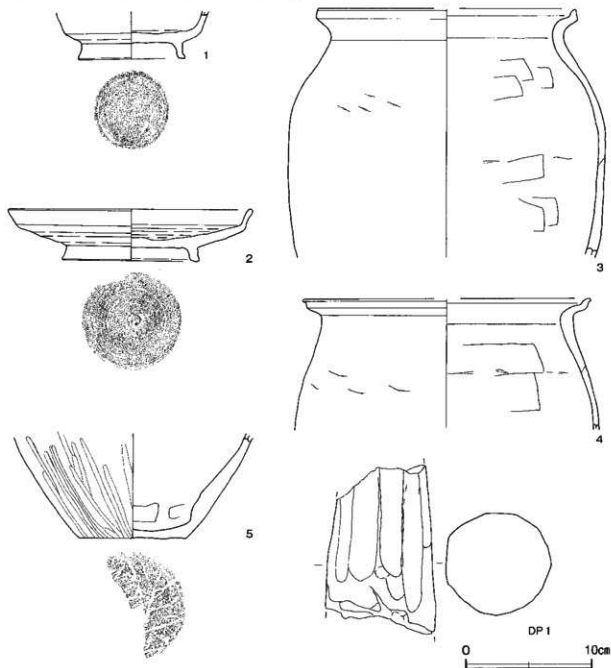
第15図 第1号堅穴建物跡実測図

覆土 10層に分層できる。第1層は竈が崩落して流入した層、第2層は粘土層、第3層はロームブロックが主体の層で、棚状施設が崩れた層の可能性がある。第4～7層は、各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第8層は壁溝の覆土、第9・10層はP5の埋土、第11層は貼床の構築土である。

土層解説

- |                           |                                 |
|---------------------------|---------------------------------|
| 1 灰 褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子微量    | 7 黒 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量         |
| 2 浅黄褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 | 8 に近い黄褐色 ロームブロック少量              |
| 3 褐色 ロームブロック微量            | 9 暗 褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量(締まり強い) |
| 4 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 10 暗 褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量       |
| 5 褐色 ロームブロック少量            | 11 褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量         |
| 6 暗 褐色 ロームブロック少量          |                                 |

遺物出土状況 土師器片63点(甕類)、須恵器片20点(坏15、高台付坏1、盤2、甕類2)、土製品1点(支脚)、金属製品3点(不明鉄製品)、鉄滓4点(51.16g)が、北壁際を中心に覆土中層から床面にかけて出土し



第16図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

ている。1・4は床面から出土した破片で、3・5は竈の燃焼部から出土した二次被熱を受けていない破片であることから、いずれも建物の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

**所見** 北壁に粘土が貼り付けてあることから、棚が設けられていた可能性がある。時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。

#### 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
1	須恵器	高台付杯	-	(37)	8.5	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り	床面	40%	
2	須恵器	壺	19.3	4.1	10.8	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中層	70% PL 6 折込産	
3	土師器	甕	[202]	(19.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部内面ヘラナデ	輪襷痕	覆土中層	10%
4	土師器	甕	[226]	(10.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラナデ	輪襷痕	床面	10%
5	土師器	甕	-	(8.2)	8.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端ヘラ削き 体部内面ナデ	底部木炭痕	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	支脚	(13.4)	8.6	7.0	(790.5)	長石・石英・雲母	橙	ヘラナデ		覆土中層 PL 9

#### 第2号竪穴建物跡（第17・18図）

**位置** 調査区中央部のB3d2区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第2号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部が調査区域外へ伸びていることから、東西軸は3.98mで、南北軸は3.44mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は23～31cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、全面が踏み固められている。貼床は、第9～11層を2～15cmほど埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

**ピット** P1は深さ15cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。第1～3層は柱抜き取り後の堆積層、第4層は埋土と考えられる。

##### ピット土層解説

1 褐色	ロームブロック少量	3 にぶい黄褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	4 黄褐色	ロームブロック少量

**覆土** 8層に分層できる。第1～4層は各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第5層は壁面の崩落土、第6・7層は竈からの流出土、第8層は壁溝の覆土である。第9～11層は貼床の構築土である。

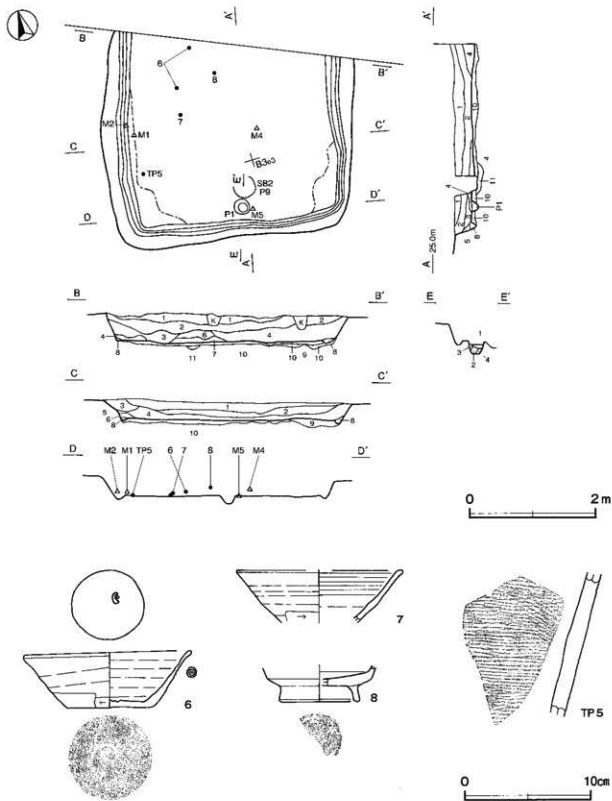
##### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7 灰褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	8 灰黄褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック微量	9 にぶい黄褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量
4 褐色	ロームブロック少量	10 黄褐色	ロームブロック中量
5 にぶい黄褐色	ロームブロック微量	11 暗褐色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量
6 灰黄褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック微量		

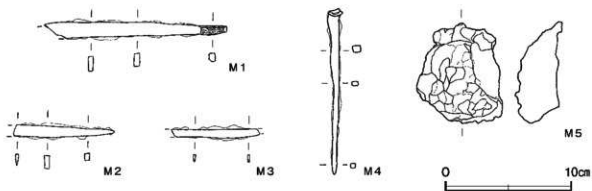
**遺物出土状況** 土師器片72点（甕類）、須恵器片66点（杯52、高台付杯1、蓋2、甕類10、瓶1）、金属製品4点（刀子3、釘1）、輪形漆1点、全体に散在した状態で出土している。6～8、TP5は覆土中層から床面にかけて出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものと見られる。



所見 床面から鉄滓が出土している。第1・3B号堅穴建物跡からも鉄滓が出土しており、これらがいずれも本跡を取り巻く位置にあることから、付近に鍛冶工房が存在した可能性が考えられる。時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第17図 第2号堅穴建物跡・出土遺物実測図



第18図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第17・18図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
6	須恵器	坏	132	4.6	6.7	長石・雲母	灰黄	良好	体部外面・底部内面上2重内のスタンプ紋を押し 体部下端手持ちへつ削り 底部多方向への削り	床面	70% PL.6 新治産
7	須恵器	坏	130	(4.3)	-	長石・石英	灰	良好	体部内面工具によるナデ 体部下端手持ちへつ削り	床面	40% PL.6
8	須恵器	黄台内坏	-	(2.9)	[6.0]	長石・石英	灰	良好	底部回転へつ削り	覆土中層	30%
TP.5	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・ 赤色粒子	灰黄	良好	体部横位の平行叩き	床面	新治産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M.1	刀子	(14.5)	1.3	0.3~0.6	(31.5)	鉄	刃部・基部一部欠損 基部に木質付着	覆土下層	PL.8
M.2	刀子	(8.1)	0.9	0.4~0.5	(15.9)	鉄	基部 刃部欠損	覆土下層	PL.8
M.3	刀子	(7.1)	0.8	0.2	(4.6)	鉄	刃部 基部欠損	覆土中層	PL.8
M.4	釘	13.3	1.2	0.3~0.5	17.8	鉄	断面方形 頭部は打撃によってやぐやれる	覆土中層	PL.8
M.5	輪形片	8.0	6.8	3.8	291.7	鉄	表面茶褐色 底面褐色 一部青灰色 表面凹凸 輪形部に乳孔	床面	PL.8

### 第3A号竪穴建物跡 (第19～21図)

位置 調査区中央部のB2e0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3B号竪穴建物跡内で確認され、本跡に伴う柱穴は第3B号竪穴建物の構築前に埋め戻されている。

規模と形状 壁は第3B号竪穴建物の構築時に壊されており、柱穴の位置や掘方の形状から長軸は4.40m、短軸は3.70mの長方形で、主軸方向はN-25°-Eと推測される。

床 中央部に掘方と思われる長径1.15m、短径0.80mの楕円形で、深さ13～25cmの土坑状の掘り込みが確認できた。貼床は、第18層を5cmほど埋土して構築されており、踏み固められている。

ピット 5か所。P.8～P.11は深さ20～52cmで、配置から支柱穴と考えられる。各柱穴で柱抜き取り痕が確認でき、柱が抜き取られた後、ロームブロックや焼土粒子を少量含む褐色土などで埋め戻されている。P.12は深さ32cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1・2層、第6・7層は締まりが強く、第3B号竪穴建物跡の貼床の構築土である。

#### ピット土層解説 (P8～P12)

1 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量	5 黄褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック中量	6 暗灰色	ロームブロック少量
3 褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	7 灰黄褐色	ロームブロック少量
4 にいり黄褐色	ロームブロック少量		

覆土 第17層は壁溝の覆土、第18層は貼床の構築土、第19・20層は床下土坑の埋土である。

#### 土層解説

17 黒褐色	ローム粒子中量	19 暗褐色	ロームブロック微量
18 にいり黄褐色	ロームブロック多量	20 黄褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量

所見 掘方調査で、P8～P12の存在と壁溝跡を確認し、本跡は第3B号竪穴建物以前の建物で、第3A号竪穴建物跡とした。建て替えによってピットの位置を替え、床を貼り直し、竈の位置も北へずらして拡張した。掘方の底面から遺物が出土していないので時期は不明であるが、本跡の主軸方向が第3B号竪穴建物跡の主軸方向とはほぼ同じであるので、時期差はそれほど無く、9世紀前葉と推定される。

### 第3B号竪穴建物跡 (第19～23図)

位置 調査区中央部のB2e0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3A号竪穴建物跡を埋め戻し、柱の配置も移動させながら、四方に拡張して構築している。第3号掘立柱建物、第67号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.20m、短軸4.52mの方形で、主軸方向はN-15°-Eである。第3A号竪穴建物跡と比べると、10度西へ振れている。壁高は40～55cmで、ほぼ直立している。

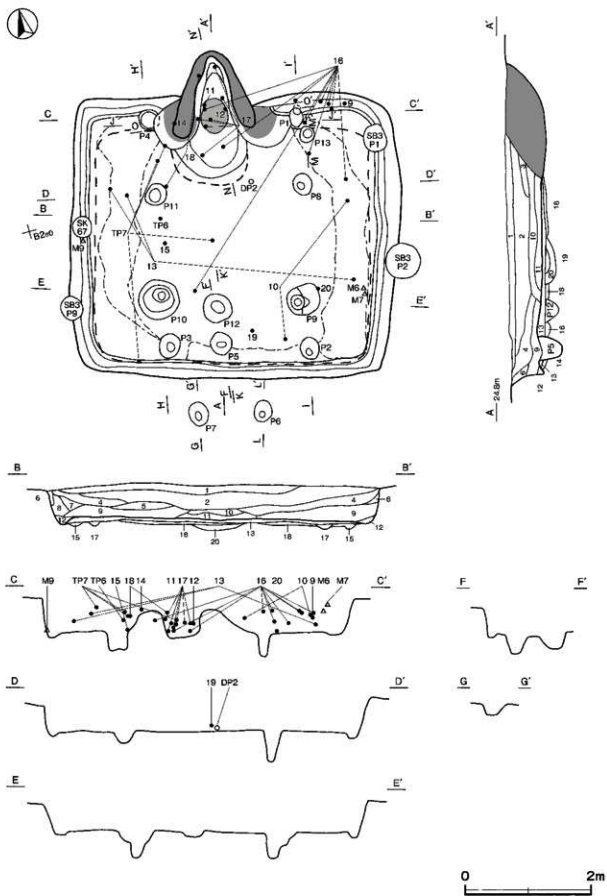
床 平坦な貼床で、ほぼ全面が踏み固められている。貼床は第13～16層を5～20cmほど埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで200cmで、燃焼部幅は48cmである。袖部は、床面と同じ高さに焼土ブロックや炭化物、粘土粒子を含んだ第6～9層を積み上げて構築されている。焼土ブロックや炭化物を含んでいることから、竈を再構築した可能性が考えられる。火床部は床面から15cmほど掘りくぼめた部分に、焼土ブロックや粘土粒子を含んだ第10～12層を埋土して構築されているが、火床面での赤変硬化は確認できなかった。煙道部は壁外に72cm掘り込まれ、火床部から外傾している。

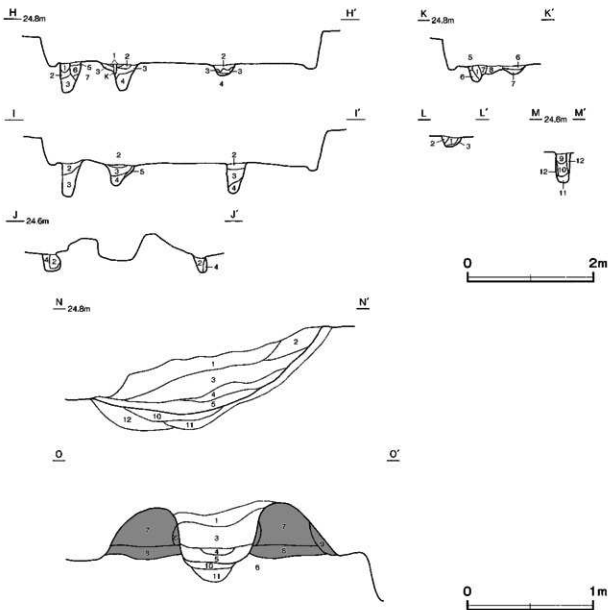
#### 覆土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土ブロック微量	7 灰黄褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
2 にいり黄褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量	8 にいり黄褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 灰赤色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、ロームブロック微量	9 灰黄褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
4 明赤褐色	焼土ブロック中量	10 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
5 にいり黄褐色	焼土粒子・灰少量	11 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子微量
6 灰黄褐色	焼土粒子多量、粘土粒子少量、炭化粒子微量	12 にいり黄褐色	焼土粒子中量、ロームブロック少量

ピット 8か所。P1～P4は深さ32～60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ36cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。第1～4層は柱抜き取り後の堆積層、第5～7層は埋土、第8層は貼床の構築土と考えられる。P6・7は深さ15cmで、壁外に位置していることから出入口施設の上屋に関連する柱穴の可能性がある。P13は深さ48cmで性格は不明である。



第19图 第3A·B号竖穴建物跡实测图(1)



第20図 第3A・B号竪穴建物跡実測図(2)

ピット土層解説 (P1～P7・P13)

- |                      |                                 |
|----------------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量                 |
| 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量   | 8 にぶい黄褐色 ロームブロック微量              |
| 3 灰黄褐色 ロームブロック微量     | 9 灰黄褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量         |
| 4 暗褐色 ロームブロック微量      | 10 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量      |
| 5 灰黄褐色 ローム粒子少量       | 11 にぶい黄褐色 ロームブロック少量・焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 6 灰黄褐色 ロームブロック少量     | 12 灰黄褐色 ロームブロック微量               |

**覆土** 12層に分層できる。第1層は流入土、第2～5層、第9～11層は各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。第6～8層は壁の崩落土、第12層は壁溝の覆土、第13～16層は貼床の構築土である。

土層解説

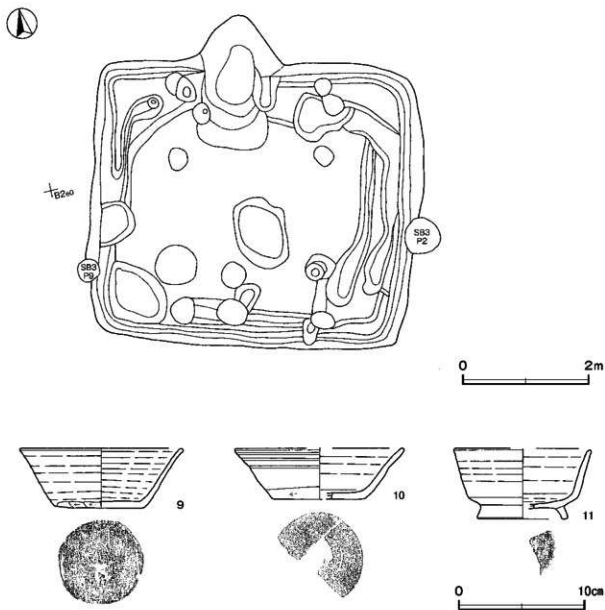
- |                                |                             |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量                | 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量         | 6 黄褐色 ローム粒子微量               |
| 3 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量      |
| 4 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量  | 8 暗褐色 ロームブロック少量             |
|                                | 9 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量        |

- 10 褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子微量  
 11 黒褐色 ロームブロック少量  
 12 灰褐色 ロームブロック微量  
 13 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量(跡まじり強い)

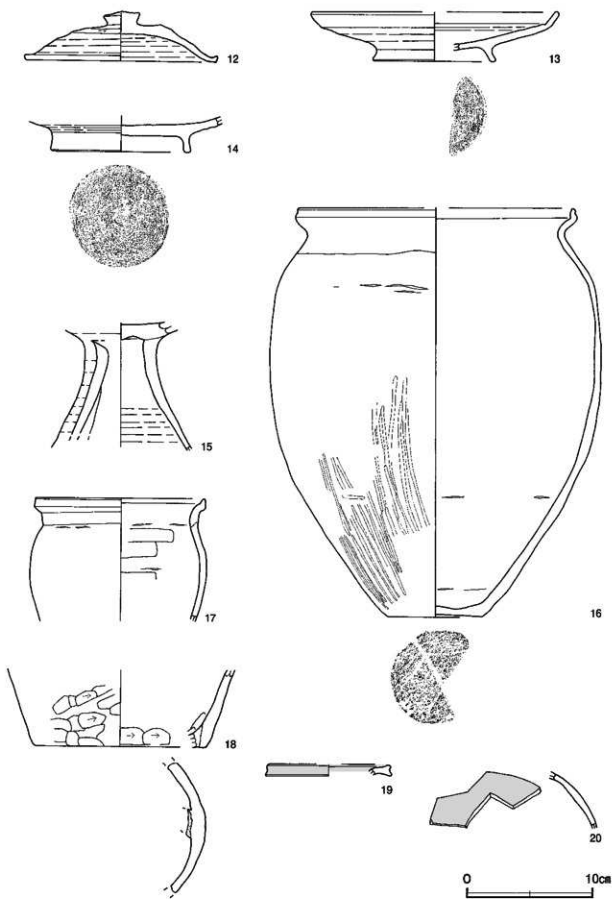
- 14 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量  
 15 暗褐色 ロームブロック微量  
 16 濃い黄褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師器片 479 点(坏7、甕類 472)、須恵器片 450 点(坏 246、高台付坏 2、蓋 9、高盤 7、甕類 173、瓶 13)、灰軸陶器片 6 点(瓶類)、土製品 6 点(支脚)、金属製品 5 点(刀子 4、釘 1)、鉄滓 1 点(29.66g)のほか、縄文土器片 5 点(深鉢)、剥片 5 点が、全域に散在した状態で出土している。遺物は主に覆土中から出土した破片で、壁際からの出土が多いことから、建物が埋没する過程で投棄されたものと見られる。10・13・16・18・TP 7 は、広範囲に散在して出土した破片が接合していることから、埋め戻す際に破碎して投棄されたものと考えられる。

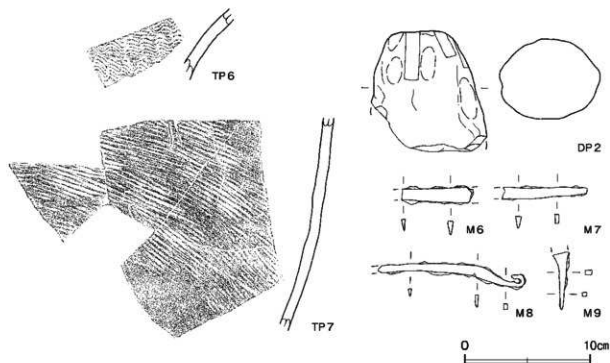
**所見** 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 21 図 第 3 A・B 号竪穴建物跡、第 3 B 号竪穴建物跡出土遺物実測図



第22图 第3B号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第23図 第3B号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第3B号竪穴建物跡出土遺物観察表(第21～23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	須臾器	坏	128	4.7	6.7	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体部下縁手持ちへう割り 底部二方向のへう割り	覆土中層	60% PL.6 新治産
10	須臾器	坏	[136]	4.0	[7.2]	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部下縁手持ちへう割り	覆土中層	40% PL.6
11	須臾器	異付付坏	[108]	5.6	[7.0]	長石・石英・赤色粒子・細礫	灰	普通	底部回転へう割り	覆土下層	30% PL.6
12	須臾器	蓋	15.0	3.9	-	長石・石英・雲母・細礫	黄灰	良好	天井部回転へう割り	覆土下層	80% PL.7 新治産
13	須臾器	盤	[198]	4.0	[9.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	底部回転へう割り	覆土下層	40% PL.6
14	須臾器	盤	-	(29)	11.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にじい黄橙	良好	底部回転へう割り	覆土上層	60% PL.6 新治産
15	須臾器	高盤	-	(10.2)	-	長石・石英・雲母	灰	良好	脚部外・内面口テナゲ 二方向の透かし孔	床面	5% PL.7 新治産
16	土師器	壺	[218]	32.4	7.4	長石・石英・雲母	にじい橙	普通	口縁部外・内面横テナゲ 体部下縁へう割り 輪襷痕	覆土中層	40% PL.7
17	土師器	小形壺	13.5	(9.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横テナゲ 体部内面テナゲ 輪襷痕	覆土下層	40% PL.7
18	須臾器	瓶	-	(6.1)	[13.6]	長石・石英・針状炭化物・細礫	黄灰	普通	体部外・内面へう割り	覆土中層	20%
19	灰釉陶器	長頸瓶	[9.6]	(0.9)	-	長石・石英	曜オリーブ	良好	外・内面輪	覆土下層	5% PL.7 中々多量産式、 向上部一箇産
20	灰釉陶器	長頸瓶	-	(4.5)	-	長石・石英	オリーブ	良好	外・内面輪	床面	5% PL.7 中々多量産式、 向上部一箇産
TP 6	須臾器	壺	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部に5本1条の輪襷状文を3段に並らす	覆土下層	新治産
TP 7	須臾器	壺	-	-	-	長石・石英・雲母	オリーブ風	普通	体部斜位の平行罫き 体部下半へう割り 内面指取痕・輪襷痕	覆土中層	PL.9 新治産

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 2	支脚	(9.5)	9.2	5.0	(41.8)	長石・石英	橙	へうテナゲ 指頭痕	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 6	刀子	(5.8)	1.2	0.3~0.4	(6.05)	鉄	刃の一部 断面三角形	覆土上層	PL.8
M 7	刀子	(6.8)	0.9	0.3~0.4	(5.55)	鉄	刃部・基部一部欠損	覆土上層	PL.8
M 8	刀子	(11.7)	1.8	0.2~0.3	(10.67)	鉄	刃部先端部欠損 基部U字状に屈曲	覆土中	PL.8
M 9	釘	(4.6)	1.3	0.3~0.4	(2.64)	鉄	角釘 頭部欠損	覆土下層	PL.8



#### 第4号竈穴建物跡（第24～26図）

**位置** 調査区西部のB2c3区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第47号土坑を掘り込み、第2号道路、第50号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部の一部が調査区域外へ延びているが、南北軸3.50m、東西軸3.50mのほぼ方形で、主軸方向はN-107°-Eである。壁高は26～40cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、南東部の一部を除き、全面が踏み固められている。南西部の壁下から東部の北半分まで壁溝が巡っている。中央部と南東部の壁際に焼土層が堆積していた。

**竈** 2か所。竈1は東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで80cmで、燃焼部幅は54cmである。袖部は、地山を掘り残して基部とし、炭化物や焼土ブロック・粘土ブロックを主体とした第7～8層を積み上げて構築されている。火床部は床面から10cmほど掘りくぼめた部分に、ロームブロックと焼土ブロックを含んだ第9・10層を埋土して構築されているが、火床面での赤変硬化は確認できなかった。煙道部は壁外に44cm掘り込まれ、煙道部から外傾している。奥壁には第11・12層を貼り付けて補強している。竈2は北壁中央部に付設されており、両袖部および火床部は遺存しない。煙道部は壁外に62cm掘り込まれている。竈2の袖部が遺存しないことや、北側壁に壁溝が検出されていることから、竈2から竈1に作り替えられたものと考えられる。

##### 竈1土層解説

1 にい・黄褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子微量	6 灰黄褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
2 にい・黄褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	7 灰黄褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	8 灰黄褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
4 灰黄褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	9 にい・赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂粒少量、ロームブロック微量	10 にい・黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
	11 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
	12 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量

##### 竈2土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量	3 にい・黄褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量	

**ビット** P1は深さ42cmで、南壁際に位置していることや、竈2と向かい合っていること、硬化面の広がりから出入口施設に伴うビットと考えられる。

##### ビット土層解説

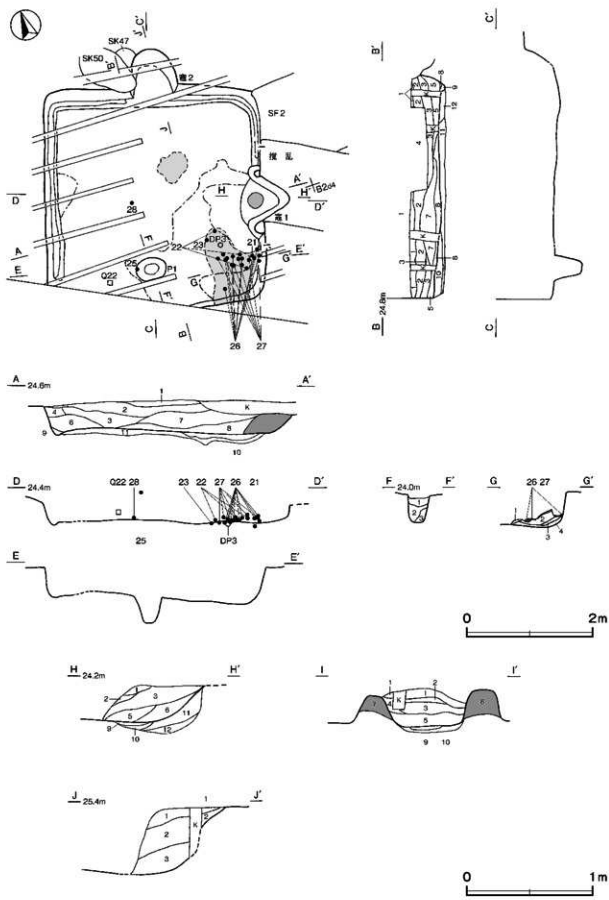
1 暗褐色 ロームブロック微量	3 灰黄褐色 ロームブロック微量
2 にい・黄褐色 ロームブロック少量	

**覆土** 9層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況をしめしていることから、埋め戻されている。第10・11層は貼床の構築土、第12層は、竈2の掘方を埋めているロームブロックや焼土ブロックを含む埋土である。

##### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量	8 にい・黄褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量	9 にい・黄褐色 ロームブロック少量
3 灰黄褐色 ロームブロック中量	10 黄褐色 ロームブロック少量
4 にい・黄褐色 ロームブロック中量	11 褐色 ロームブロック少量
5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	12 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
6 にい・黄褐色 ロームブロック微量	
7 灰黄褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量	

**遺物出土状況** 土師器片42点（甕類41、甌1）、須恵器片59点（坏39、蓋2、高盤1、盤1、甕類15、甌1）、土製品1点（支脚）、石器1点（砥石）のほか、縄文土器片3点（深鉢）が、竈1の南側から南壁際の覆土中層から下層にかけて出土している。21～23・26・DP3をはじめ多くの遺物が破片で、焼土ブロックを含む



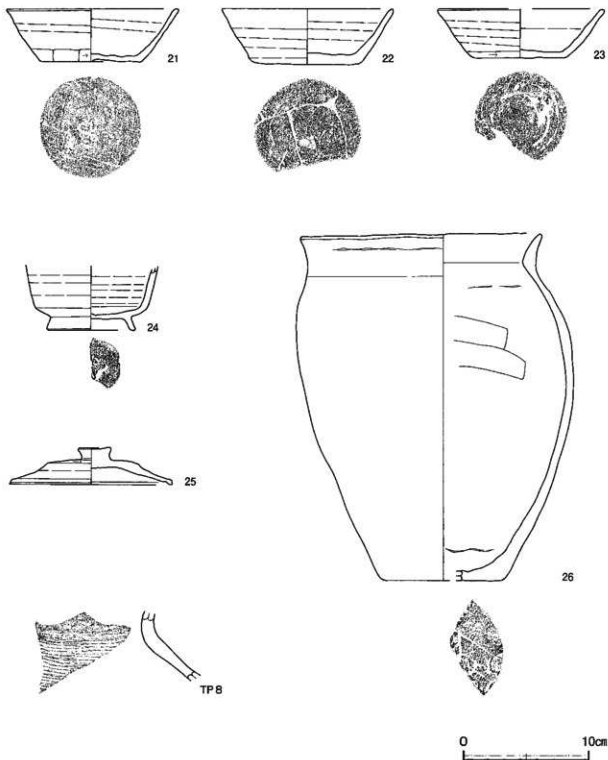
第 24 图 第 4 号竖穴建物跡实测图

赤褐色土中から出土している。二次焼成は受けておらず、上屋等が焼失した後、投棄された可能性がある。  
 また、21は残存状況が良好で、26の下から逆位の状態で出土しており、遺棄されたと考えられる。

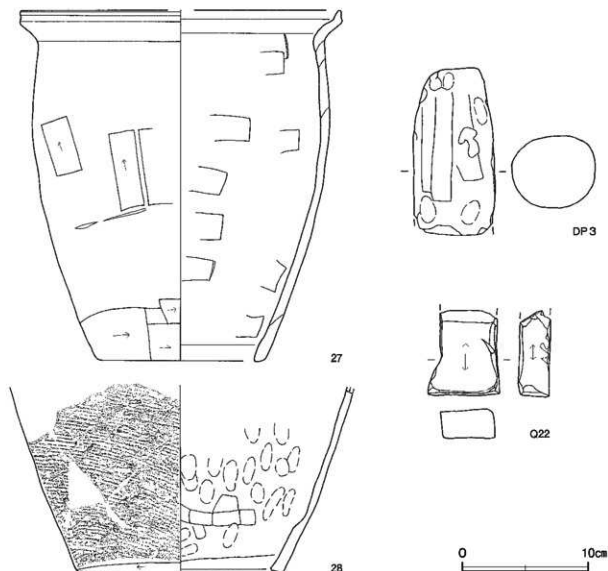
土器出土状況図土層解説

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| 1 赤褐色 焼土ブロック中量    | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 濃い黄褐色 ロームブロック中量 | 4 暗褐色 ローム粒子微量   |

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第25図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第26図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図2)

第4号竪穴建物跡出土遺物観察表(第25・26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
21	須恵器	杯	136	4.2	8.0	長石・石英・雲母	灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	床面	96% PL.6 新治東産
22	須恵器	杯	136	4.4	8.4	長石・石英・雲母・赤色粘土・磁礫	橙	普通	底部一方向のヘラ削り	床面	70% PL.6 新治東産
23	須恵器	杯	[131]	3.9	7.2	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	60% PL.6 新治東産
24	須恵器	高台白耳	-	(5.2)	(6.2)	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り	覆土中	10%
25	須恵器	蓋	[129]	2.9	-	長石・石英・雲母	灰	良好	天弁部回転ヘラ削り	覆土上層	40% PL.7 新治東産
26	土師器	甕	191	27.5	(9.4)	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部表面剥離のため、調整不可 体部内面ナデ 輪轆痕 底径大差痕	床面	70% PL.7
27	土師器	瓶	[25.4]	27.9	(13.0)	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部下端ヘラ削り 体部外面ヘラ削り 体部内面ナデ 輪轆痕	床面	25%
28	須恵器	瓶	-	(14.7)	16.4	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄橙	良好	体部横位の平行叩き 体部下端ヘラナデ 体部内面横ナデ・部頭痕 輪轆痕	床面	40% PL.7
TP.8	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	オリーブ黒	普通	体部横位の平行叩き	覆土中	新治東産

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP.3	支脚	(13.2)	6.5	4.0	(45.29)	長石・石英	橙	ヘラナデ 部頭痕	床面	PL.9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 22	砥石	(69)	5.7	2.6	(1597)	安山岩	砥面2面	覆土中層	

表4 奈良・平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)			土柱穴	出入口	ピット	伊・甕	竪穴				
1	B 3 65	N-8°-E	方形	3.97 × 3.55	3~12	貼床 平土	全周	4	1	1	北扉	-	人為	土師器、須恵器、土師 器、金属製品、鉄滓	8世紀後葉	
2	B 3 42	N-13°-E	[方形・ 長方形]	3.98 × (3.44)	23~31	貼床 平土	ほぼ 全周	-	1	-	-	-	自然 人為	土師器、須恵器、土師 器、金属製品、鉄滓	9世紀中葉	本跡→SB 2
3A	B 2 60	N-25°-E	長方形	4.40 × 3.70	-	貼床	-	4	1	-	-	-	人為	-	9世紀前葉	本跡→SI 3 B
3B	B 2 60	N-15°-E	方形	5.20 × 4.52	40~55	貼床 平土	全周	4	1	3	北扉	-	人為	土師器、須恵器、土師 器、金属製品、鉄滓	9世紀前葉	SI 3 A→本跡 →SI 3、SK67
4	B 2 63	N-107°-E	[方形]	3.50 × 3.50	26~40	貼床 平土	半周	-	1	-	北扉 東扉	-	人為	土師器、須恵器、土師 器、金属製品、鉄滓	8世紀後葉	SK71→本跡 →SF2、SK50

## (2) 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡 (第27図)

**位置** 調査区中央部のB 3 62区、標高24 mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第9・41号土坑を掘り込み、第1号道路に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行3間、梁行3間の竪柱建物跡で、桁行方向がN-5°-Eの南北棟である。規模は桁行5.70 m、梁行4.80 mで、面積は27.36㎡である。柱穴寸法は、桁行が1.9 m (63尺)、梁行が1.6 m (53尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 12か所。P 1～P12は主柱穴である。平面形は円形または楕円形で、長径62～86cm、短径58～62cm、深さ23～54cmで、掘方の断面は箱掘り状またはU字状である。全ての柱穴で柱のあたりを確認した。

第1層は柱痕跡、第2～5層は埋土である。

#### 柱穴土層解説 (各柱穴共通)

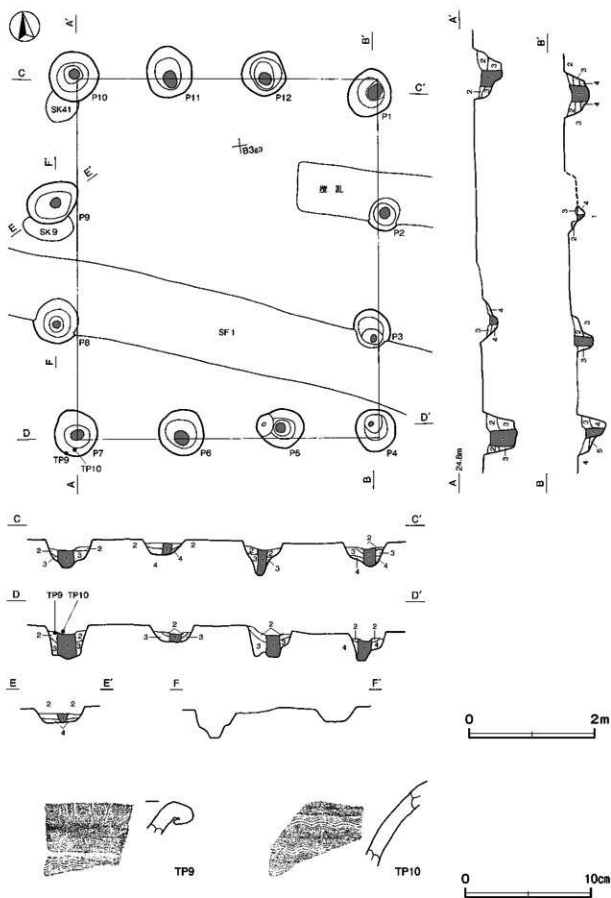
1 黒褐色 ロームブロック微量	4 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量	5 黒褐色 ロームブロック少量
3 黒褐色 ロームブロック中量	

**遺物出土状況** 土師器片13点(甕類)、須恵器片8点(甕類)、石器1点(鎌)、鉄滓1点(3.89g)が出土している。TP 9・10はP 7から出土している。土器片はP 9～P 11柱穴の覆土中から、石器、鉄滓は東部の遺構確認面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器や、第1号竪穴建物跡と桁行方向がほぼ同じであることから、同時期の8世紀後葉と考えられる。性格は倉庫と考えられる。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	種別	形種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 9	須恵器	甕	長石・石英・雲母	黄灰	口縁部に4本1条の櫛掻波状文を巡らす	P 7層方埋土	PL 9 新治産地
TP10	須恵器	甕	長石・石英・雲母	灰オリーブ	口縁部に5本1条の櫛掻波状文を巡らす	P 7層方埋土	PL 9 新治産地



第 27 图 第 1 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

### (3) 土坑

#### 第10号土坑 (第28図)

**位置** 調査区中央部のB3e区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 遺構南部が攪乱を受けており、東西径1.22m、南北径1.10mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ、長径方向はN-35°-Eと推測できる。深さは40cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

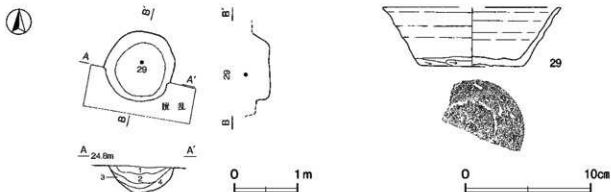
**覆土** 4層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

#### 土層解説

- |         |                       |          |                |
|---------|-----------------------|----------|----------------|
| 1 褐 色   | ロームブロック少量、焼土粒子微量      | 3 黒 褐 色  | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片5点(甕類)、須恵器片6点(坏)、金属製品1点(不明)のほか、縄文土器片1点(深鉢)が出土している。29は覆土上層から出土していることから、埋め戻す過程で投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第28図 第10号土坑・出土遺物実測図

#### 第10号土坑出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	須恵器	坏	[140]	4.7	[82]	長石・石英・雲母	暗灰青	普通	底部下縁手持ちへう張り 底部多方向のへう張り	覆土上層	40% 新治産

#### 第64号土坑 (第29図)

**位置** 調査区中央部のB2d0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第2号道路に掘り込まれている。

**規模と形状** 周辺が攪乱を受けているため、東西径1.10m、南北径0.85mしか確認できなかった。平面形は楕円形と考えられ、直径方向はN-63°-Eと推測できる。深さは68cmで、底面はほぼ平坦である。南北壁は垂直に、東西壁は緩やかに立ち上がっている。

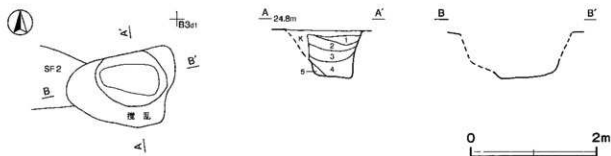
**覆土** 5層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

#### 土層解説

- |          |           |          |           |
|----------|-----------|----------|-----------|
| 1 暗 褐 色  | ロームブロック中量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 におい黄褐色 | ロームブロック中量 | 5 褐 色    | ロームブロック中量 |
| 3 におい黄褐色 | ロームブロック少量 |          |           |

**遺物出土状況** 須恵器片3点(坏2, 高台付坏1)が覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。土器は壊された後に埋め戻す過程で投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から9世紀代と考えられる。



第29図 第64号土坑実測図

表5 奈良・平安時代土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
10	B 3 e1	N-33°-E	[楕円形]	(1.22) × (1.10)	40	平坦	縄針	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	
64	B 2 d0	N-63°-E	[楕円形]	(1.10) × (0.85)	68	ほぼ平坦	直立 縄針	人為	須恵器	本跡→SF 2

#### 4 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は, 掘立柱建物跡1棟, 土坑1基を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 掘立柱建物跡

##### 第4号掘立柱建物跡 (第30・31図)

**位置** 調査区中央部のB 2 c8区, 標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第2号道路に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行3間, 梁行2間の掘立柱建物跡で, 桁行方向がN-80°-Wの東西棟である。規模は桁行6.30m, 梁行3.40mで, 面積は21.42㎡である。柱間寸法は, 桁行が2.1m(7尺), 梁行が1.7m(5.6尺)で柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 11か所。P 1～P 10は主柱穴である。平面形は円形または楕円形で, 長径52～62cm, 短径42～62cm, 深さ34～70cmで, 掘方の断面は箱掘り状またはU字状である。P 11は東柱, または間仕切柱の柱穴と考えられる。平面形は不整形で, 長径1.10m, 短径0.80m, 深さは45cmで, 掘方の断面は箱掘り状またはU字状である。P 1～P 10の柱穴で柱のあたりを確認した。第1層は柱抜き取り後の覆土, 第2層は柱痕跡, 第3～6層は埋土である。

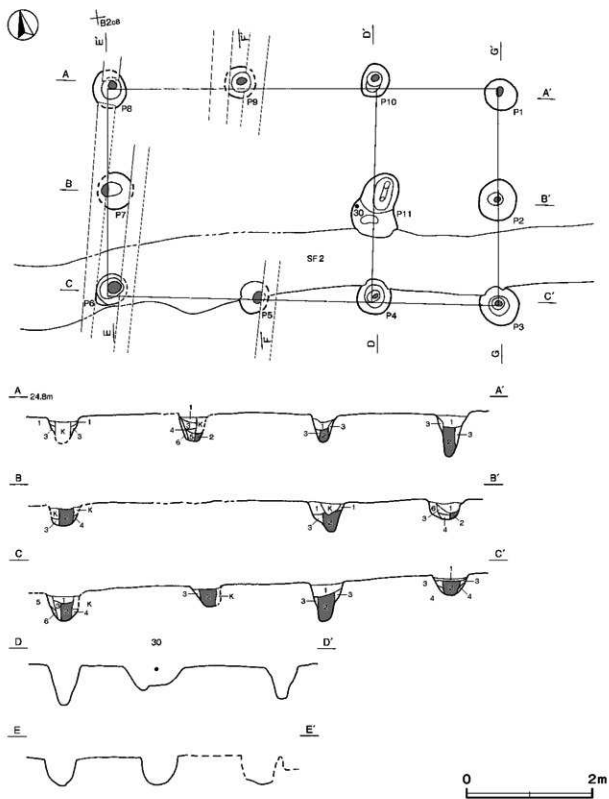
##### 柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量   | 4 黒褐色 ロームブロック中量   |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量   |
| 3 暗褐色 ロームブロック微量 | 6 濃い黄褐色 ロームブロック微量 |

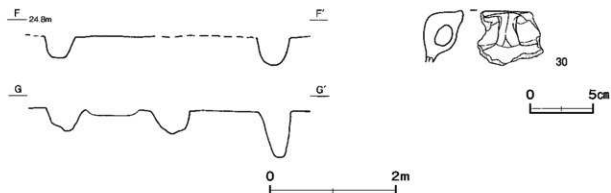


**遺物出土状況** 土師質土器片1点（内耳鍋）がP11から出土している。30は細片であることから、埋め戻す過程で混入したと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から16世紀末～17世紀前葉と考えられる。性格は倉庫と考えられる。



第30図 第4号掘立柱建物跡実測図



第31図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第4号掘立柱建物跡遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	土師製土器	内耳罎	-	(4.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐色明黄緑	普通 外・内面ナデ	P11埋土	

(2) 土坑

第45号土坑(第32図)

位置 調査区中央部のB2c0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.26m、短径0.73mの楕円形で、長径方向はN-61°-Eである。深さは56cmで、底面は凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。両層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

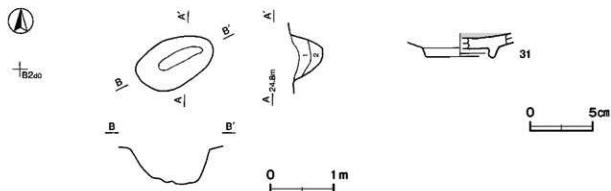
土層解説

1 褐色 少量 ロームブロック中量

2 灰黄褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 陶器片1点(碗類)のほか、土師器片1点(甕類)が覆土中から出土している。31は細片であることから、埋め戻す過程で混入したと考えられる。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。



第32図 第45号土坑・出土遺物実測図

第45号土坑出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	輪美	産地	出土位置	備考
31	陶器	碗	-	(1.8)	(5.4)	長石・石英・細砂	外面クワコナデ	灰輪	瀬戸英濃	覆土中	10%

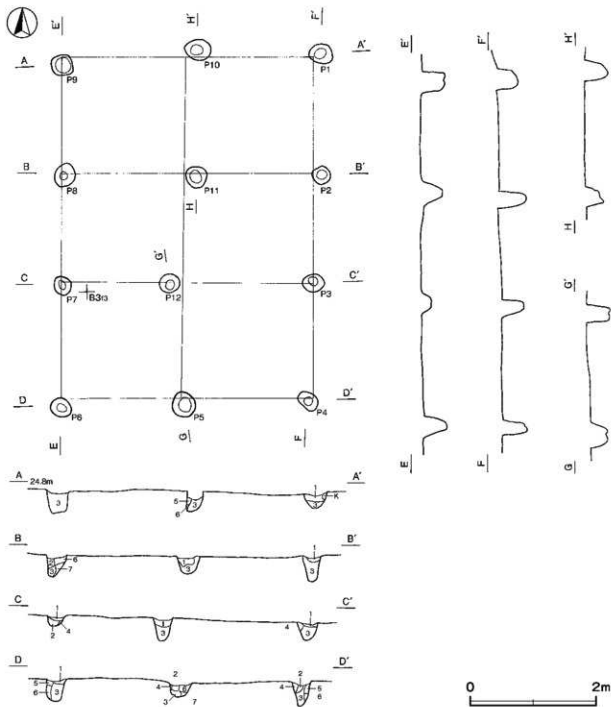
5 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明らかでない掘立柱建物跡2棟、溝跡2条、道路跡3条、土坑53基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡（第33図）

位置 調査区中央部のB 3e2区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。



第33図 第2号掘立柱建物跡実測図

**重複関係** 第2号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は桁行5.40m、梁行4.00mで、面積は21.60㎡である。柱間寸法は、桁行が1.8m(6.0尺)、梁行が2.0m(6.6尺)で柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 12か所。平面形は円形または楕円形で、長径30～42cm、短径28～36cmである。深さは14～44cmで、掘方の断面はU字状である。第1～4層は柱抜き取り後の覆土、第5～7層は埋土である。

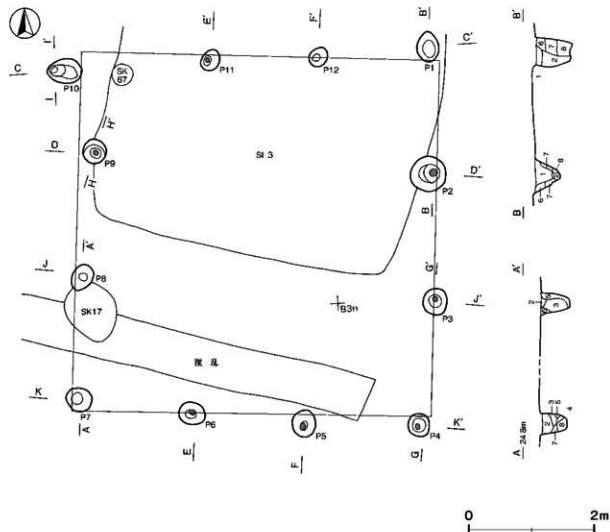
**土層解説**

- |          |           |          |           |
|----------|-----------|----------|-----------|
| 1 灰褐色    | ロームブロック微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色    | ロームブロック少量 | 6 灰黄褐色   | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色    | ロームブロック少量 | 7 黄褐色    | ロームブロック中量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |          |           |

**所見** 時期は、伴う遺物が出土していないため不明であるが、本跡の西に位置する第3号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ同じであることから、同時期に機能していた可能性がある。性格は倉庫と考えられる。

**第3号掘立柱建物跡 (第34・35図)**

**位置** 調査区中央部のB 2e0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。



第34図 第3号掘立柱建物跡実測図(1)

**重複関係** 第3号竪穴建物跡，第17号土坑を掘り込み，第67号土坑に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行3間，梁行3間の側柱建物跡である。規模は桁行梁行とも5.70mで，面積は32.49㎡である。

柱間寸法は，桁行及び梁行とも1.9m（6.3尺）である。P2～P6・P9・P11の底面で柱のあたりを確認した。

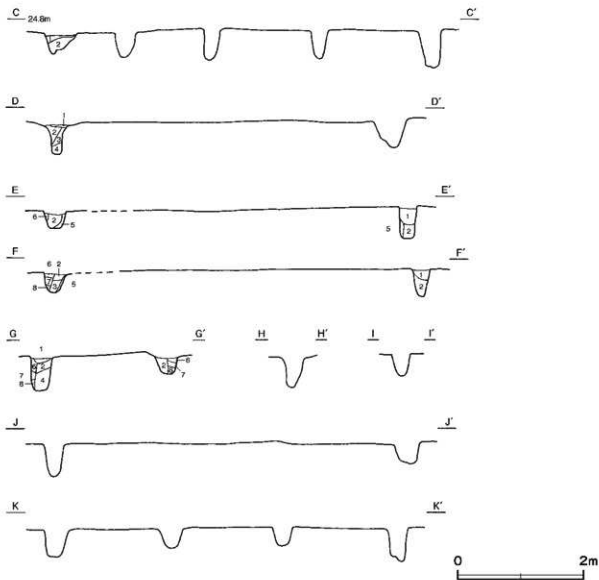
**柱穴** 12か所。平面形は円形または楕円形で，長径53～55cm，短径26～31cmである。深さは26～58cmで，掘方の断面は箱掘り状またはU字状である。

**覆土** 第1～5層は柱抜き取り後の覆土，第6～8層は埋土である。

**土層解説**

1 黒褐色	ロームブロック微量	5 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	6 にい黄褐色	ロームブロック中量
3 黒褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ロームブロック中量
4 黒色	ロームブロック少量	8 黄褐色	ロームブロック中量

**所見** 時期は，伴う遺物が出土していないため不明であるが，本跡の東に位置する第2号掘立柱建物跡と，桁行方向がほぼ同じであることから，同時期に機能していた可能性がある。性格は倉庫と考えられる。



第35図 第3号掘立柱建物跡実測図(2)

表6 その他の掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱穴		主な出土遺物	時期	備考	
						桁×墨間	桁×墨間(m)	間隔(m)	深さ(m)				構造
2	B 3e2	N-4'-E	3×2	5.40×4.00	21.60	1.8	2.0	総柱	12	円形・楕円形	14~44	不明	SI 2→本跡
3	B 2e0	N-8'-E	3×3	5.70×5.70	32.49	1.2×2.0	1.4×1.8	欄柱	12	円形・楕円形	26~58	不明	SI 3, SK17→本跡 →SK67

(2) 溝跡

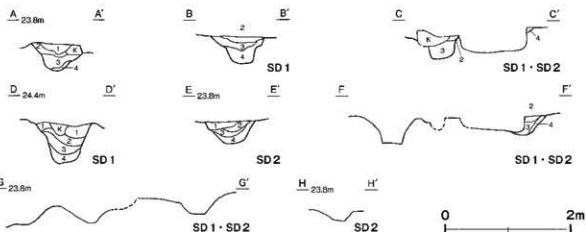
今回の調査で、調査区東部において溝跡2条を確認した。以下、土層解説と断面図(第36図)、一覧表を掲載し、平面図においては遺構全体図(第3図)に掲載する。

第1号溝土層解説

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1 褐灰色 ローム粒子微量    | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 灰黄褐色 ロームブロック微量 | 4 褐色 ロームブロック少量  |

第2号溝土層解説

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 褐色 ロームブロック少量  | 3 黒褐色 ロームブロック少量  |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 4 灰黄褐色 ロームブロック中量 |



第36図 その他の溝跡実測図

表7 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面図	規模			断面	壁土	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
1	B 4i2-B 4j2	N-3'-W	[直線]	(6.72)	0.72~0.90	0.24~0.31	20~28	逆台形	外積	自然入為	須磨器 灰質(劣化激しく判読不能)	本跡→SK 4・5・8 SD 2と番号不明
2	B 4j1-B 4k3	N-17'-E N-7'-W	[L字状]	(8.82)	0.30~0.80	0.16~0.30	14~36	逆台形	外積	人為	陶片	本跡→SK 2・4 SD 1, SK 8と番号不明

(3) 道路跡

第1号道路跡(第3・37図)

位置 調査区中央部のB 2f0~B 3i5区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡、第3号階し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 B 3i5区から西北西に向かって延びている。確認できた長さは25.4m、幅0.44~1.06m、深さ

10cmである。断面は緩やかなU字状である。地山が硬化している。

**覆土** 単一層の流入土である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

**所見** 時期は、伴う遺物が出土していないため不明である。本跡の西北西に、ほぼ同規模、同形状の第3号道路跡を確認しており、同一の道路跡の可能性はある。



第37図 第1号道路跡実測図

**第2号道路跡 (第3・38図)**

**位置** 調査区西部のB 2c3～B 2d0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第4号堅穴建物跡、第4号掘立柱建物跡を掘り込み、第44・56～59・64号土坑に掘り込まれている。

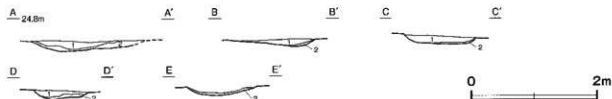
**規模と形状** B 2d0区から西に向かって伸びている。確認できた長さは27.20m、幅0.38～1.10m、深さ10～16cmである。断面は緩やかなU字状である。地山が硬化している。

**覆土** 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック微量      2 暗褐色 ロームブロック微量

**所見** 時期は、伴う遺物が出土していないため不明である。



第38図 第2号道路跡実測図

**第3号道路跡 (第3・39図)**

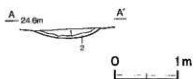
**位置** 調査区西部のB 2d4～B 2d5区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** B 2d5区から西北西に向かって伸びている。確認できた長さは54m、幅0.42～0.86m、深さ15cmである。断面は緩やかなU字状である。地山が硬化している。

**覆土** 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量  
2 にはみ暗褐色 ローム粒子・黒色粒子微量



第39図 第3号道路跡実測図

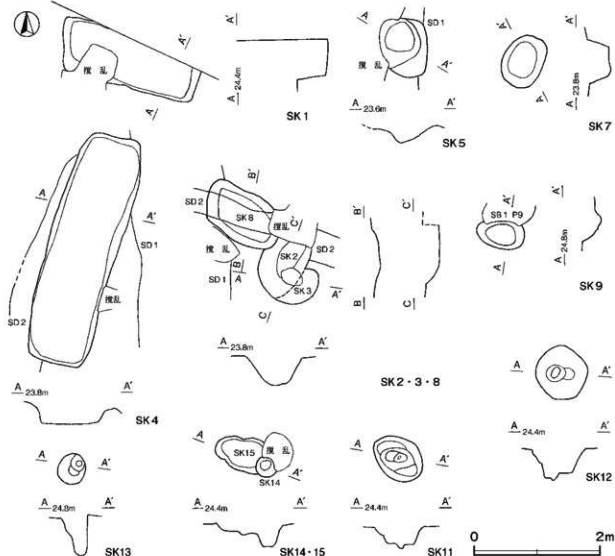
所見 出土遺物がなく、時期は不明である。本跡の東南東に、ほぼ同規模、同形状の第1号道路跡を確認しており、同一の道路跡の可能性はある。

表8 その他の道路跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
1	B 200~B 315	N-63°-W	直線	(25.4)	0.44~1.50	0.44~1.06	10	U字状	縦斜	自然	SB 1, TP 3 → 本跡
2	B 203~B 240	N-85°-W	直線	(27.2)	0.90~1.60	0.38~1.10	10~16	平坦	外傾	自然	SI 4, SB 4 → 本跡 → 55.4・56・59・61
3	B 244~B 265	N-71°-W	直線	(5.4)	0.82~1.26	0.42~0.86	15	U字状	縦斜	自然	

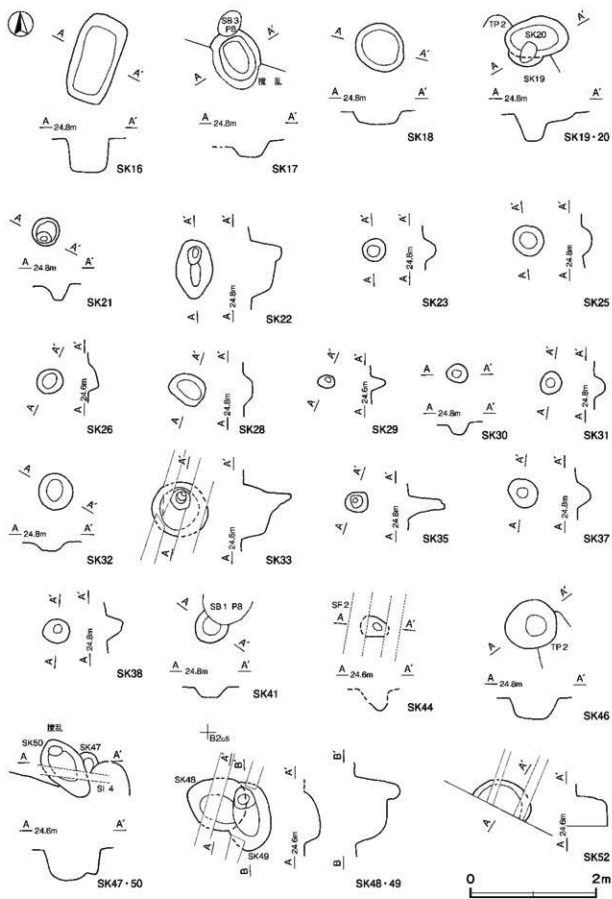
(4) 土坑

今回の調査で、時期や性格が不明な土坑53基を確認した。以下、実測図(第40~42図)及び一覧表を掲載する。

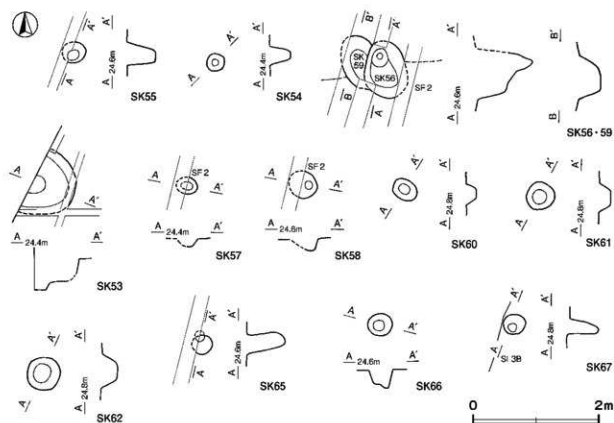


第40図 その他の土坑実測図(1)





第 41 図 その他の土坑実測図(2)



第42図 その他の土坑実測図(3)

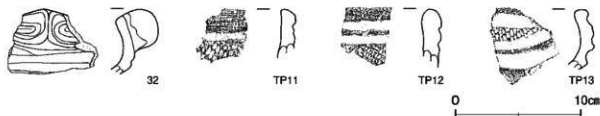
表9 その他の土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 412	N - 75° - W	[長方形]	2.26 × (0.86)	48	平型	直立	人為	土師器	
2	B 412	N - 18° - E	[楕円形]	(0.92) × 0.72	26	平型	緩斜	人為		SD 2, SK 3 → 本跡 → SK 8
3	B 412	N - 44° - E	[楕円形]	0.72 × (0.62)	44	皿状	緩斜	人為		本跡 → SK 2
4	B 412	N - 17° - E	隅丸長方形	3.72 × 1.06	30	平型	外傾 緩斜	人為	土師器, 須恵器, 陶器, 金属製品	SD 1・2 → 本跡
5	B 412	N - 33° - W	[楕円形]	1.12 × (0.73)	28	皿状	緩斜	人為		SD 1 → 本跡
7	B 319	N - 33° - E	[楕円形]	0.86 × 0.58	34	平型	外傾	人為		
8	B 412	N - 60° - W	[楕円形]	(1.28) × 0.72	10	平型	緩斜	自然		SD 1, SK 2 → 本跡, SD 2土質不明
9	B 312	N - 72° - W	[楕円形]	0.80 × (0.48)	33	平型	外傾	自然		本跡 → SB 1
11	B 318	N - 54° - W	[楕円形]	0.90 × 0.58	36	有段	外傾	人為		
12	B 318	-	[円形]	0.84 × 0.79	48	凹凸	外傾	人為		
13	B 312	N - 0°	[楕円形]	0.50 × 0.44	62	皿状	外傾	人為		
14	B 319	-	[円形]	0.35 × (0.32)	38	平型	外傾	人為	土師器, 須恵器	SK15 → 本跡
15	B 319	N - 60° - W	[不整楕円形]	(0.88) × 0.48	16	凹凸	緩斜	人為		本跡 → SK14
16	B 311	N - 15° - E	隅丸長方形	1.40 × 0.66	52	平型	直立	人為	土師器, 須恵器	
17	B 219	N - 64° - W	[楕円形]	(0.96) × (0.76)	44	皿状	緩斜		縄文土器	本跡 → SB 3
18	B 210	N - 58° - W	[楕円形]	0.80 × 0.72	20	平型	緩斜	自然		
19	B 311	N - 70° - E	[楕円形]	0.54 × (0.41)	18	皿状	緩斜	自然	土師器, 須恵器, 金属製品	TP 2 → 本跡 → SK 20
20	B 311	N - 80° - E	[楕円形]	1.10 × 0.62	16	平型	緩斜	人為	土師器, 金属製品	TP 2, SK19 → 本跡
21	B 219	-	[円形]	0.43 × 0.43	23	平型	外傾	人為	縄文土器	

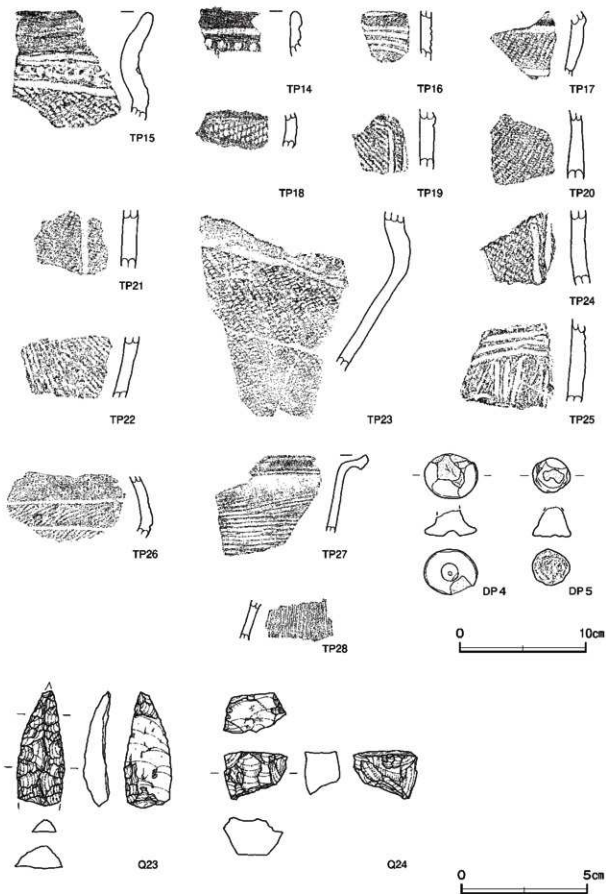
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
22	B 2e9	N-4°-W	楕円形	0.92 × 0.59	36	平坦	外傾	人為		
23	B 3f1	-	円形	0.36 × 0.36	18	平坦	外傾	自然		
25	B 2e9	-	円形	0.48 × 0.48	16	平坦	縦斜	人為		
26	B 2e9	-	円形	0.40 × 0.40	22	平坦	縦斜	人為		
28	B 2e9	N-50°-W	楕円形	0.57 × 0.45	14	平坦	外傾	人為	縄文土器	
29	B 2e8	-	円形	0.26 × 0.26	24	皿状	外傾	自然 人為		
30	B 3d1	N-82°-W	楕円形	0.36 × 0.28	16	平坦	外傾	自然 人為		
31	B 3d1	N-38°-E	楕円形	0.36 × 0.32	18	平坦	縦斜	人為		
32	B 3d1	-	円形	0.56 × 0.52	12	平坦	縦斜	人為		
33	B 2c7	-	円形	0.86 × 0.86	76	平坦	縦斜 直立	人為	土師器, 須恵器	
35	B 3f2	N-70°-W	楕円形	0.38 × 0.34	58	凹凸	外傾	人為		
37	B 3f1	N-42°-W	楕円形	0.46 × 0.40	22	皿状	縦斜	自然	土師器	
38	B 2e9	N-82°-W	楕円形	0.43 × 0.39	23	平坦	外傾	人為		
41	B 3f2	N-52°-W	[楕円形]	0.50 × (0.37)	16	平坦	外傾	-	縄文土器	本跡→SB 1
44	B 2e6	N-76°-W	[楕円形]	(0.43) × 0.31	30	皿状	外傾	人為		本跡→SF 2
46	B 3f1	-	[円形]	0.76 × (0.54)	36	平坦	縦斜	人為		TP 2→本跡
47	B 2c3	N-9°-E	[楕円形]	(0.40) × (0.24)	42	平坦	外傾	-		本跡→SI 4, SK50
48	B 2c5	N-60°-W	[楕円形]	(0.96) × 0.82	22	平坦	外傾	人為		SK49→本跡
49	B 2c5	N-17°-W	[楕円形]	1.09 × (0.56)	52	平坦	外傾	人為		本跡→SK48
50	B 2c3	N-34°-W	楕円形	1.04 × 0.60	50	平坦	縦斜	自然 人為		SI 4, SK47→ 本跡
52	B 2c1	N-63°-W	[楕円形]	0.91 × (0.45)	38	平坦	外傾	人為		
53	B 2b1	N-28°-E	[楕円形]	(1.06) × (0.67)	42	平坦	縦斜	人為	縄文土器, 須恵器	
54	A 2j2	-	円形	0.27 × 0.27	42	平坦	縦斜	人為		
55	A 2j3	N-85°-E	[楕円形]	(0.38) × 0.31	47	平坦	縦斜	自然 人為		
56	B 2e4	N-6°-W	[楕円形]	0.92 × 0.68	80	平坦	縦斜	人為		SF 2, SK59→ 本跡
57	B 2e4	N-64°-W	[楕円形]	(0.35) × 0.27	10	平坦	縦斜	人為		SF 2→本跡
58	B 2e4	N-63°-E	[楕円形]	(0.46) × 0.42	12	平坦	縦斜	人為		SF 2→本跡
59	B 2e4	N-24°-W	[楕円形]	0.50 × (0.39)	31	平坦	縦斜	人為		SF 2→本跡 →SK56
60	B 2e9	N-56°-W	楕円形	0.42 × 0.32	14	平坦	縦斜	人為		
61	B 2e9	-	円形	0.46 × 0.46	16	平坦	縦斜	人為		
62	B 2e9	-	円形	0.52 × 0.52	22	平坦	縦斜	自然		
65	B 2c7	-	[円形]	0.32 × (0.32)	62	皿状	直立	-		
66	B 2b8	-	円形	0.38 × 0.38	28	凹凸	直立	-		
67	B 2e0	-	円形	0.35 × 0.35	60	皿状	直立	人為		SI 3B→本跡

### (5) 遺構外出土遺物

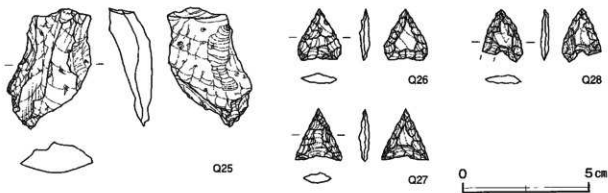
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第 43 図 遺構外出土遺物実測図(1)



第44图 遺構外出土遺物実測図(2)



第45図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(第43~45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	つまみ状把手→口縁部隆帯貼付→太沈線を巡らす	SK41 覆土中	

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	単節縄文L.R.→口縁部隆帯貼付→沈線を巡らす	B 2b4	
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	単節縄文L.R.→口縁上部に隆帯貼付→太沈線で並行縄文	SK10 覆土中	PL 9
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黄灰	口縁部太隆帯により文様描画→区内単節縄文L.R.	SF 1 覆土中	PL 9
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・針状鉱物	黒	口縁部に1条の沈線→円形刺突文	表土	PL 9
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単節縄文L.R.→敷文帯下に平截竹管による爪型文→L隆帯で別部文帯帯を区画	B 3d2	PL 9
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	単節縄文L.R.→平截竹管による横位の並行縄文	SI 3 覆土中	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	1段多糸縄文L.R.→口縁部沈線による区画	SF 2 覆土中	PL 9
TP18	縄文土器	深鉢	長石	黄橙	単節縄文L.R.→沈線で楕円区画	SI 3 覆土中	
TP19	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄	無節縄文L.R.→沈線で区画	B 2b4	
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	1段多糸縄文L.R.→沈線が入る	SK21 覆土中	
TP21	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	0段多糸縄文L.R.→沈線による型垂文	SF 2 覆土中	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・雲母	橙	無節縄文L.	B 2b4	
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	単節縄文L.R.→沈線で区画→区画内無文	C 4a1	PL 9
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄陶	0段多糸縄文L.R.→隆帯貼付→沈線で区画	SK53 覆土中	
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	一部型垂文→縦横の縄文	SB 4 覆土中	PL 9
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤陶	無節縄文L.→2本の平行沈線を巡らす	B 3e2	PL 9
TP27	灰忠器	瓶	長石・石英・雲母	黄灰	体部外面横位の平行引き	B 3c5	新治産
TP28	陶器	深鉢	長石・石英・細礫	暗赤	内面10条1単位の横目	B 2位	瀬戸・美濃系

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 4	スタンプ 粘土製品	(3.6)	4.2	(2.1)	(1.97)	長石・石英・雲母	橙	ナデ成形	SI 3 覆土中	PL 8
DP 5	スタンプ 粘土製品	2.8	3.0	(2.4)	(1.54)	長石・石英・雲母	明橙	ナデ成形	SF 2 覆土中	PL 8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 23	矢頭部	(4.6)	1.9	1.1	(7.45)	黒曜石	縦長割片を素材とし主要面側面からの連続する幅状の割片によって片面調整を施す。先端部は欠損。基部は背面側からの加工によって折損している。背面中央部は縁をなし前面は三角形を呈する。	SF 1 覆土中	PL 8・10
Q 24	石核	2.6	1.9	1.5	15.98	黒曜石	打面は平直で細かい敲打痕を有する。下端部の縁は直線的につぶれており下方からの微細な調整が連続している。	B 3f1	PL10
Q 25	二次調整 割片	5.7	3.4	1.6	6.48	黒曜石	厚みのある縦長割片。打面は単調磨面。両側縁の下部に微細な調整痕を有する。背面には同一方向の微細な調整痕。左側縁は主要調整面側から、右側縁及び下部は背面側からの急角度の調整を施す。	SD 1 覆土中	PL 8・10
Q 26	鏃	2.1	1.7	0.4	1.14	チャート	平基無茎鏃	SB 1 覆土中	PL 8
Q 27	鏃	2.1	1.8	0.4	1.03	チャート	円基無茎鏃	SB 2 覆土中	PL 8
Q 28	鏃	(2.1)	(1.6)	0.3	(0.91)	チャート	円基無茎鏃	B 2b4	PL 8

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の調査で、当遺跡から旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の陥し穴4基、土坑2基、奈良・平安時代の竪穴建物跡4棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、室町時代の掘立柱建物跡1棟、土坑1基を確認した。また、出土した遺物は、旧石器時代の石器から室町時代の陶器と多時期及び多種にわたっている。ここでは、主として旧石器時代から平安時代までに検出した遺構と遺物について概要を述べまとめとする。

### 2 旧石器時代

当遺跡で、石器集中地点1か所を確認した。石器集中地点で出土した石器類の内訳は、搔器1点、刮器1点、剥片82点（二次調整剥片1点を含む）の計84点で、総重量は106.62gである。その他表土から石核、第1号道路の覆土から尖頭器、第1号溝の覆土から二次調整痕のある剥片がそれぞれ出土している。石材の内訳は、黒曜石が85点、安山岩1点、頁岩1点である。出土石器類の多くが不純物の多い黒曜石で、当遺跡から約106km北西の栃木県高野山産と考えられる。下の表は、田宮平遺跡周辺で、黒曜石が出土した遺跡の一覧である。

表10 田宮平遺跡周辺の黒曜石出土遺跡一覧

番号	遺跡名	田宮平遺跡からの 方位と距離	出土位置	黒曜石の種類と点数	産地
1	西ノ原遺跡 <sup>1)</sup>	北東 約40km	石器集中地点	ナイフ形石器 (1)、ピエス・エスキュー (4)、 削器 (2)、石核 (1)、二次調整剥片 (3)、剥片 (15)	高野山産。
			表土	剥片 (5)	
2	華人山遺跡 <sup>2)</sup>	北東 約40km	表探	ナイフ形石器 (1)	高野山産。
3	中下原遺跡 <sup>3)</sup>	北東 約35km	表探	尖頭器 (1)	不明
4	ヤツノ上遺跡 <sup>4)</sup>	北東 約35km	表土	搔器 (1)	不明
5	中久秀遺跡 <sup>5)</sup>	北東 約35km	表探	尖頭器 (1)	高野山産。
6	下大井遺跡 <sup>6)</sup>	北 約35km	石器集中地点	ナイフ形石器 (1)、剥片 (2)	高野山産・信州系
			SE30 覆土中	二次調整剥片 (1)	
			表土	削器 (1)、石核 (1)、剥片 (1)	

周辺遺跡と比較すると、当遺跡の黒曜石の出土数が突出していることが分かる。また、横長剥片が多いのも特徴の一つである。石器集中地点から出土した石器類は、製品としての石器は少なく、剥片が多く出土している。その剥片も細かなものが多いことから、石器製作跡でも最終調整の場であったと考えられる。

### 3 縄文時代

縄文時代の遺構は陥し穴4基と土坑2基を確認した。当遺跡の陥し穴の配列をみると、第1・2・4号陥し穴が長軸方向を平行にして直線的に並んでおり、南北それぞれの調査区域外へ広がる可能性もある。また、狩猟方法は各陥し穴の周辺に柵や杭を立てたような痕跡がないことや、第1・2・4号陥し穴の延長上には稲荷川が位置し、台地が川に向かって緩やかに傾斜していることなどから、水辺に向かう動物の動線を利用した「待ち型」の狩猟方法であったと推測される<sup>7)</sup>。

調査区域内では土器片（加曾利E式、堀之内式）の採集はできるものの、竪穴建物跡は確認できなかった

ことから、陥し穴を設置した狩猟場と考えられる。当遺跡と同じ台地上の縄文時代の遺跡は、当遺跡から北西方向約200mの天寶喜遺跡<sup>8)</sup>、南西方向約700mの天寶喜西遺跡が所在している。天寶喜遺跡では、縄文時代早期中葉から晩期までの土器や縄文時代の土坑7基が確認されている。その中の1基は縄文時代の堅穴建物跡の柱穴の可能性があるとして報告されている。当遺跡近隣の縄文時代の遺跡から集落跡は確認されておらず、基点となる集落がどこに存在していたのかは明らかではない。

#### 4 奈良・平安時代

今回確認した遺構は、堅穴建物跡4棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基であり、堅穴建物跡の時期は8世紀後葉～9世紀中葉の3時期に分けることができる。

I期（8世紀後葉）・・・第1・4号堅穴建物跡、第1号掘立柱建物跡

II期（9世紀前葉）・・・第3号堅穴建物跡

III期（9世紀中葉）・・・第2号堅穴建物跡

第1号堅穴建物跡は北壁に壁柱穴を有し、第3号堅穴建物は建物を拡張している。周辺遺跡では同様の特徴をもつ堅穴建物跡は確認されていない。また、第4号堅穴建物跡は竈を北壁から東壁へと作り替えている。周辺遺跡では、下大井遺跡で検出された9世紀前葉の堅穴建物跡の東壁で、竈を作り替えている例があるが、他では見られない。今回確認した堅穴建物跡は4棟と数は少ないが、周辺では類例が少ない特徴のある堅穴建物跡である。

また、第3号堅穴建物跡からは、井ヶ谷78号窯式の可能性が高い灰軸陶器長頸瓶が出土している。当遺跡周辺の下大井遺跡では、9世紀後葉の堅穴建物跡から井ヶ谷78号窯式の灰軸陶器長頸瓶や黒笹90号窯式の椀、表土からは三彩小蓋壺と黒笹90号窯式の灰軸陶器長頸瓶が出土している。ヤツノ上遺跡<sup>11)</sup>では、平安時代前期の堅穴建物跡から猿投産の灰軸陶器短頸壺が出土している。当遺跡から北東へ約3.1kmにあり、小野川左岸に位置する行人田遺跡<sup>9)</sup>では、9世紀第1四半期の堅穴建物跡から井ヶ谷78号窯式の灰軸陶器長頸瓶が出土している。これらのことから、小野川周辺や当遺跡を含む稲荷川左岸の台地上の一般集落でも、9世紀に入ると施軸陶器を入手できたことが分かる。

尾張国猿投産の施軸陶器は、東海道を経由して海上交通でもたらされたと想定されている<sup>10)</sup>。当遺跡から西へ約1kmには稲荷川があり、牛久沼に注いだ後、小貝川・利根川へと合流している。東海道は、下総国於賦（我孫子市）駅家から小貝川を渡り、常陸国（榛谷）駅家へと続く<sup>11)</sup>。当遺跡へは、この小貝川の水運を利用し、施軸陶器をはじめ多くのものがもたらされたと考えられる。

第2号堅穴建物跡からは椀形漆1点、第1・3B号堅穴建物跡からは鉄滓がそれぞれ出土している。下大井遺跡では、8世紀後葉～9世紀前葉の堅穴建物跡7棟から鉄滓が出土し、そのうち2棟からは小片ではあるが羽口を検出している。更に、小野川左岸に位置するヤツノ上遺跡でも、平安時代の前期に比定されている堅穴建物跡から鉄滓が出土している。これらのことから、小野川周辺や当遺跡を含む稲荷川左岸の台地上に鉄生産に関わる工房跡の存在が想定される。

#### 5 おわりに

今回の調査で、当遺跡は旧石器時代から室町時代まで、人々の生活が断続的に続いていることが分かった。縄文時代後期前半以降に空白期間があり、8世紀後葉になって集落が営まれるようになる。律令国家の施策の三世一身の法や墾田永年私財法などの開発政策が出され、新しく形成された集落と考えられる。道路幅の

調査のため明確ではないが、今回の調査区は台地縁部に位置しており、更に北側に広がっている可能性がある。

小野川右岸の下大井遺跡は、古墳時代中期から後期にかけての小集落で、奈良・平安時代には大規模な集落へと転換していく。当遺跡も小野川右岸に位置しており、下大井遺跡に付属する集落の可能性もある。

今後の調査・研究の進展によって、当遺跡の性格や位置付け、周辺遺跡との繋がりなど、点と点の部分が点から線へ、線から面へととなり河内郡河内郷の更なる歴史が解明されることを期待したい。

#### 註

- 1) 深谷憲二 柴田博行「牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡・西ノ原遺跡・華入山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第113集 1996年6月
- 2) 註1)に同じ
- 3) 註1)に同じ
- 4) 小高五十二「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集 1993年3月
- 5) 荒井保雄「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 1993年9月
- 6) a 川津法典「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1 下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集 2001年3月  
b 島田和宏「下大井遺跡2 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第197集 2003年3月
- 7) 後藤孝行「中内西ノ東遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第234集 2005年3月
- 8) 石橋充 土生朗治「天宝喜遺跡」つくば市教育委員会、山武考古学研究所 2004年11月
- 9) 白田正子「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 馬場遺跡・行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集 1996年3月
- 10) 川井正一ほか 奈良・平安時代研究班「茨城県における施軸陶器の検討(1)～(5)」『研究ノート』4～8号 茨城県教育財団 1995年～1999年
- 11) a 古代交通研究会「日本古代道路事典」古代交通研究会編 2004年5月  
b 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 第12回特別展「古代のみち-常陸を通る東海道駅跡-」上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2013年3月



写 真 図 版



田宮平遺跡遠景（南東から）



第1号石器集中地点  
遺物出土状況



第1号陥し穴  
完掘状況



第3号陥し穴  
完掘状況

PL2



第1号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第1号竖穴建物跡  
完掘状況



第2号竖穴建物跡  
完掘状況



第3B号竖穴建物跡  
遺物出土狀況



第3B号竖穴建物跡  
庵遺物出土狀況



第3A・B号竖穴建物跡  
完掘狀況

PL4



第4号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第4号竖穴建物跡  
完掘状況



第1号掘立柱建物跡  
遺構確認状況



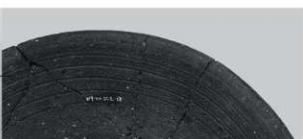
第3号掘立柱建物跡  
完掘状況



第4号掘立柱建物跡  
完掘状況



第2・3号道路跡  
完掘状況

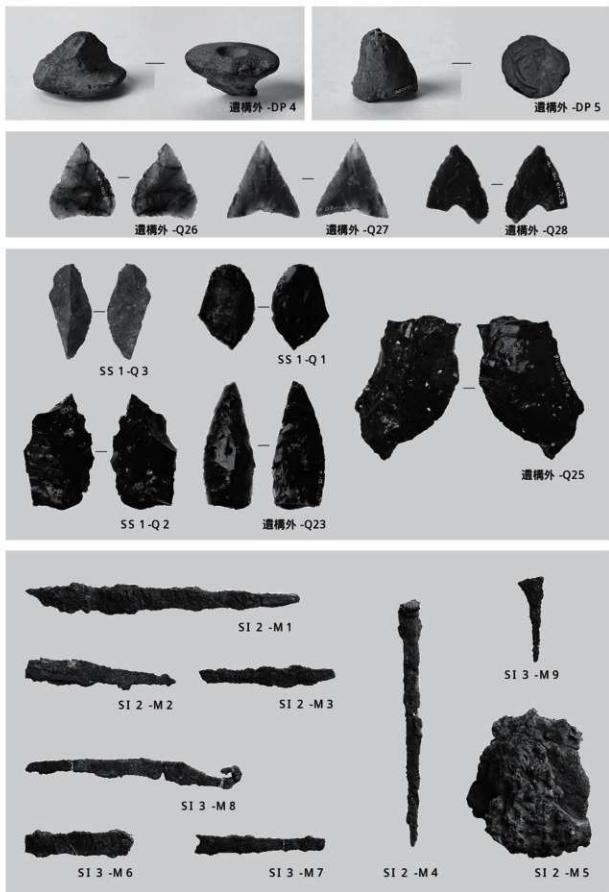


第1 - 4号豎穴建物跡出土土器

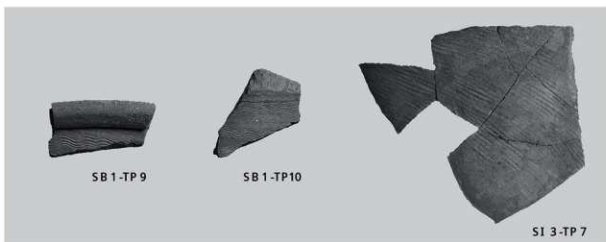


第3・4号竖穴建物跡出土土器

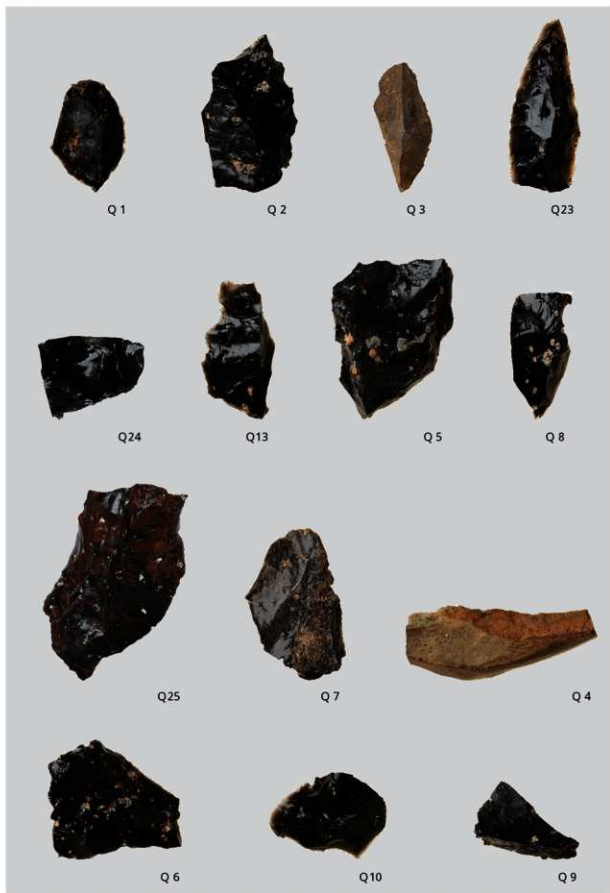




第2・3号竖穴建物跡，第1号石器集中地点，遺構外出土土製品・石器・金属製品，椀形滓



第1・3・4号竖穴建物跡，第1号掘立柱建物跡，第6・36号土坑，遺構外出土土器・土製品



出土石器類

## 抄 録

ふりがな	たくうだいらいせき							
書名	田宮平遺跡							
副書名	都市計画道路田宮・中柏田線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第410集							
著者名	兼子博史							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2016(平成28)年3月18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
田宮平遺跡	茨城県牛久市 田宮町字平 1030番地ほか	08219 - 110	36度 59分 2秒	140度 7分 56秒	23 - 24m	20141001 - 20101131	1362㎡	都市計画道路 田宮・中柏田 線整備事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
田宮平遺跡	石器製作跡	旧石器	石器集中地点	1か所	石器(搗器・削器), 剥片			
	狩猟場	縄文	陥し穴 土坑	4基 2基	縄文土器(深鉢)			
	集落跡	奈良・平安	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑	4棟 1棟 2基	土師器(坏・甕・小型甕・甌), 須恵器(坏・高台付坏・蓋・ 盤・高盤・甕・甌), 灰釉陶 器(長頸瓶), 土製品(支脚), 石器(砥石) 金属製品(刀子・ 釘), 椀形滓			
	室町		掘立柱建物跡 土坑	1棟 1基	土師質土器(内耳鍋), 陶器 (碗)			
	時期不明		掘立柱建物跡 溝跡 道路跡 土坑	2棟 2条 3条 53基	須恵器(甌), 陶器(搗鉢), 縄文土器(深鉢) 土製品(ス タンブ形土製品), 石器(尖 頭器・鎌), 石核, 二次調整 剥片			
要約	旧石器時代は石器製作跡, 縄文時代は狩猟場として, 奈良・平安時代になると集落として 土地利用されていたことが分かった。第3号竪穴建物跡は建物を拡張した様子を, 第4号竪 穴建物跡は竈を北から東へ作り変えた様子を確認した。第2号竪穴建物跡からは椀形滓, 第 1・3号竪穴建物跡からは鉄滓が出土しており, 周辺に鍛冶工房があった可能性がある。							

## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×7film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷	印刷所へは、	Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第410集

## 田宮平遺跡

都市計画道路田宮・中柏田線整備事業  
地内埋蔵文化財調査報告書

平成28(2016)年 3月15日 印刷

平成28(2016)年 3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
HP <http://www.jbaraki-maibun.org>

印刷 (有)川田プリント

〒310-0041 水戸市上水戸4丁目63-53  
TEL 029-253-5551